

昭和25年1月1日  
昭和26年12月31日

# 資料翻刻Ⅰ

# 石川淳日記



石川淳 (いしかわ・じゅん 明治32・1899～昭和62・1987)

東京生まれ。小説家。年少より漢籍、江戸文化に親しむ。東京外国語学校(現・東京外国語大学)フランス語科卒業後、ジッド、モリエール、アナトール・フランスの翻訳を手がける。1935年「佳人」で小説デビュー。37年「普賢」で芥川賞受賞。38年「マルスの歌」が反軍国的とされ発禁処分を受ける。戦後は昭和末期まで「黄金伝説」「焼け跡のイエス」「紫苑物語」「至福千年」「狂風記」「六道遊行」など旺盛に筆を揮った。和漢洋の該博な知識、批判と遊芸の精神に富み、「夷齋」の号を冠した随筆でも活躍。1947年から世田谷区北沢1丁目、48年から翌年にかけて同区北沢2丁目在住。

【資料概要】

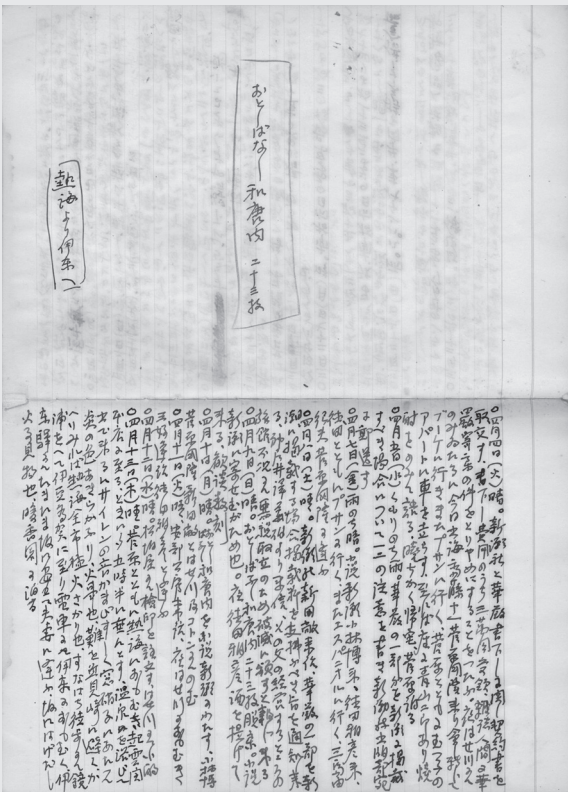
資料番号 129123

《石川淳日記 昭和25年1月1日―昭和26年12月31日》

A4判大学ノート(縦300mm×横210mm) 60枚綴り、

縦書、自筆部分91面、ペン書、一部赤鉛筆書

石川眞樹氏寄贈(令和元年度)



日記本文は大学ノート見開きの右面に縦書で書かれ、左面(縦書なので上段に当たる)には入稿記録、旅行先、メモ書きなどを記載。

石川淳は昭和24(1949)年7月に世田谷区北沢2丁目から品川区高輪南町に転居。本資料は翌25(1950)年正月から翌年大晦日に亘って書かれた自筆日記で、執筆や行動、交友のみならず、この家での来客対応、読書の覚え書きも多い。また全集未収録の自作句なども詠み込まれている。

なお、他に3冊同体裁の大学ノートの日記を受贈し、それぞれの内容は昭和27年1月1日〜12月31日(資料番号129124)、昭和28年1月1日〜12月31日(資料番号129125)、昭和29年1月1日〜8月25日(資料番号129126)となっている。本誌次号(下巻)で翻刻掲載を予定している。

【凡例】

■漢字の旧字体は新字にあらためた。ただし、人名・固有名詞などは一部表記(旧字)通りとした

■仮名 表記通り(ほぼ旧仮名、ただしカタカナ表記の撥音便は表記通り)

■数字・記号 表記通り

■読み易いように文と文の間に適宜一字空き挿入。なお句読点の配置は表記通り

■外国語 フランス語・英語・漢文の表記通り。適宜訳を(一)で補記した

■判読不明の文字は、その字数分、□□□とした

■本文対面頁(上段)に本人筆の脱稿記録、覚書および翻刻者註(\*)は各日末尾に記載

■註は適宜。店名は業態が判りづらい場合や頻出店で店名表記が揺れる際に入れた

資料翻刻1

石川淳日記

(昭和25〜26年)

昭和二十五年 一九五〇年

○一月一日(日)雨。宝焼酎にドライマルチニを混じたるものこれ我家の屠蘇なり 終日籠居して芥子園画伝\*を観る 夜群像\*編集長高橋清次来話サントリイ一壘を持参す 作品\*のために随筆の稟を起さんとして成らず 寅の春一瀉千里とおもへども伸びなやみたる筆のたけ哉  
\*芥子園画伝 中国・清代に刊行された彩色版画絵手本。各時代の画論の要旨を集録のうえ、樹石など、山水の描法を分類して多くの図を掲載。

\*群像 文芸誌

\*作品 文芸誌

○一月三日(火)曇。池田夫人通称ヨシ来、ルパン千代来、ともに年賀の客也 和田よりハゼを贈らる てんぶらにして食ふ 昨日の初釣のみやげ也

○一月四日(水)晴。パールたま女来 菓子折を贈らる、窪田啓作\*谷崎終平\*来話  
\*窪田啓作 フランス文学者、詩人 銀行員。本名・開造。窪田般彌の兄

\*谷崎終平 谷崎潤一郎の末弟

○一月五日(木)晴。戸石泰一\*来話。ちかごろ丹羽某にヘッラヒをるよし戸石みづから語る

\*戸石泰一 小説家

○一月七日(土)晴寒し。新春はじめて外に出づ、三越にてJean Cocteau\*: Théâtre 1を購ふ 値六百七十五円、戦後はじめて購ふところの新著のフランス本也、帰途銀座はせ川にてのむ 菅原国隆\*来り会す。ともに新ばしパールに行く  
\*Jean Cocteau ジャン・コクトー。フランスの詩人、小説家、劇作家。美術、映画でも活躍

\*菅原国隆 新潮社の編集者

○一月八日(日)晴。文藝春秋社杉村良吉来話。夜前日より書きつぎたる草藁成る。ニセモノ記二十一枚、これ一篇の生活記録也、作品に寄すべし

○一月十日(火)雪。昨夜徳田雅彦\*鷺尾洋三\*とともにせ川 ブーケルパンにのみ廻り乱酔 帰途終電車を乗り越し下北沢に至って菊水別

館に泊す 今朝帰来すれば牡丹雪菲菲たり 昨夜はせ川にてはじめて  
三島由紀夫\*と逢ふ

\* 徳田雅彦 文藝春秋社の編集者 徳田秋声四男

\* 鷺尾洋三 文藝春秋社の編集者

\* 三島由紀夫 小説家

○一月十一日(水) 晴。文藝春秋にて一万円借。文学界\*に寄稿すべきことを約す。ルパン及はせ川にてのむ。牛肉を買つてかへる

\* 文学界 文芸誌

○一月十二日(木) 晴。作品社員入江久恵来ニセモノ記事稿をわたす。小山清\*来話、千勝三岳夫\*来 トブロク一升を持参す 千勝上京して新制高等学校の教師となりたるよし也

\* 小山清 小説家

\* 千勝三岳夫 千勝三喜男(歌人)のことか

○一月十三日(金) 晴。先年ニセモノ事件の際提出したる証拠品の件につき東京地方検察庁より引取方通知し来れるに依り右の品不用のおもむきをいひてやる、夜炬燵にて Coteau : Les Parents terribles を読む

○一月十四日(土) 雪。小山書店ワタリ来 芥川賞全集印税内金三千元持参す

○一月十六日(月) 晴。文学界伏島来話。夜銀座に出で作品社にて八木岡英治\*由紀しげ子\*に逢ふ、はせ川にて永井龍男\*鷺尾洋三に逢ふ、鷺尾とともにルパンに行く、牛肉を買ひて帰宅

\* 八木岡英治 編集者。中央公論社、創芸社、作品社など

\* 由紀しげ子 小説家

\* 永井龍男 小説家

○一月十九日(木) 晴。新潮社酒井健次郎来。華嚴\*書下し出版につき

交渉ありたれど話まともならず、しばらく様子を見ることせず、別に新潮文庫にて短篇集を編むべきことを約す、伊藤濱子来話、角川を辞してCIDの日本語教師にならんとするよし

\* 「華嚴」昭和二十四年「表現」連載中、同誌休刊により未完となった小説

○一月二十一日(土) 晴。神田月曜書房にて戦後代表作集印税三千元受領。はせ川にて徳田雅彦永井龍男と逢ふ、デュドロツプインに立寄る

○一月二十二日(日) 晴。海老雄二\*妻子五人づれにて来訪す、海老名一家そろつて上京することはじめてなりといふ、すなはちこれを歓待す、けふよねの誕生日也

\* 海老名雄二 石川が海老名家に間借りしたこともあり、戦前より交流が深い

○一月二十三日(月) 晴。群像高橋清次来話、写真をうつすことを約束す。神田におもむき小山書店高村昭\*と会ふ、はせ川に立寄りてかへる

\* 高村昭 小山書店の編集者

○一月二十五日(火) 晴。河辺健一來話。群像高橋清次写真師をつれて来り写真をうつす雑誌に載せむとなり

○一月二十六日(水) 晴。日本橋高島屋にて現代油画展覧会を観る、窪田啓作を東京銀行に訪ひコーヒー屋にて閑談す、帰途はせ川にてのむ、文藝春秋社員尾実ながし座にあつて清水武雄の息子と名乗る。意外也、すなはち余が従兄の子也

○一月二十七日(木) 晴。糸書房天野亮来話。福田恆存\*紹介也、作家論集を出版するにつき余の著森鷗外の一部を転載したしといふ、これを承諾す。安部公房\*来話、小説の書けざるよしを語る、池田夫人来話

\* 福田恆存 評論家、翻訳家、劇作家、演出家

\* 安部公房 小説家、劇作家、演出家

○一月二十八日(金) 晴。文藝春秋におもむき文学界の原藁の遅るるべきことをいふ。省線電車内にて神西清\*に逢ふ、新潮文庫に収むべき余の小説集の件につき新潮社より解説を依頼されたりと神西咄也 目黒書店人間\*編集室にて木村徳三\*と語る

\* 神西清 ロシア文学者、翻訳家、小説家、文芸評論家

\* 人間 文芸誌

\* 木村徳三 「人間」創刊時から編集を担当

○一月卅一日(火) 晴、あたゝかきこと五月のごとし、漂然として巷をあるく、小山書店にて三千元受領 先日來書きつゞけたる小説草藁夜を徹して筆を呵し曉に成る 影ふたつ三十八枚也

上段：影ふたつ 三十八枚

○二月一日(水) 晴。影ふたつの草藁を文藝春秋にわたす 文学界三月号に掲載すべきもの也 井上勇\*を時事通信社に訪ひ上海の人沈承怡に紹介さる 沈氏二十九歳新聞記者小説鳩の町の著者也 その著を贈られてその署名の筆蹟を見るに未だ必ずしも筆札にたくみならず けだし中国戦後派青年の特徴也 沈氏の招きにて山田吉彦\*とともに丸の内コレスポンドンクラブにてウィスキーを供さる 帰途はせ川にてひとりのむ

\* 井上勇 翻訳家、ジャーナリスト

\* 山田吉彦 小説家、翻訳者「きだみのる」の本名

○二月三日(金) 雨のち晴。昨夜乱酔のため今日夜に至るまで昏昏として書を読むにも堪へず 菅原国隆来話、高橋清次来 先日うつしたる余の写真を持ち来る 引伸し四枚贈らる その中の一枚を群像四月号に載すべしといふ

○二月五日(日) 晴。昨夜また乱酔 今朝またしたがつて昏昏、やれや

れ也 井澤義雄\*神戸より上京し来る ウナギ蒲焼を贈らる 井澤とともに浅草に行きロツク座にてエロシヨを観る 池のほとりなるてんぶら屋にててんどんを食ふ、留守中信州吉江真澄たづね来れるよし

\* 井澤義雄 フランス文学者

○二月六日(月) 晴。芝区役所に都民税を納む。夜海老名雄二来話、将棋をさし焼酎をのむ

○二月九日(木) 曇。やや暖か也、二三日まへより風邪の気味にて昨夜来いささか発熱す、余に於て発熱はめづらしきこと也 この風邪珍重也 但執筆おつくうにていそぎの原藁にはかに成りがたき模様なり

○二月十日(金) 晴。文藝春秋新社出版部鷺尾洋三宛に単行本野守鏡出版の件は取やむべきことを通告す、これ旧臘話しおきたる件にして、鷺尾考慮中と称し返事を寄こさざれば打切としたるもの也

○二月十一日(土) 雨。風邪を押ししてセントラル映画試写を見に行きたるに何とかいふアメリカ物愚劣鈍重呆れはてたり 帰途はせ川にて小酌 夜伊藤濱子来話、ちかごろ悪質の風邪流行し余少しく癒えたるに

よねまたこれに冒さる

○二月十三日(月) 晴。小山清戸石泰一來話。群像高橋清次来。風邪気未だ全く去らず人と語るにもうし。高橋に単行本出版の件を話す

○二月十四日(火) 雪。河出書房田中西二郎\*竹田博\*来、小説大系戦後篇の一卷として坂口大宰織田及余の篇を編むよし 承諾しおく、焼酎をのみ雑談するに田中共産党ざらひにて賀川豊彦\*を偉人といふ。この男余が架蔵の仏国禪師文殊指南図説\*及明板\*李長吉\*集を示すにその何の書たるかを全く解せず。田中は北京に在りしこと二年半也、しかも唐山\*の書に暗くして賀川豊彦に明か也、余大いに笑ふ、馬鹿の見本也

の政府也

上段「夜は夜もすがら 三十六枚」

○二月二十一日(火)晴。文学界より影ふたつの草藁用済につき取りもどす。これは同誌三月号に発表のもの也。作品社にて檀一雄\*木山捷平\*八木岡英治に逢ふ。すなはちこの三人をさそひてはせ川にてのむ。作品社より坂口安吾の近著勝負師を贈らる。

\*檀一雄 小説家

\*木山捷平 小説家、詩人

○二月二十三日(木)晴。窪田啓作を東京銀行に訪ひてAlbert Camus : La Peste をゆづり受く、窪田とともにはせ川にてのむ

○二月二十五日(土)晴。六興出版社大門一男吉川某をともなひて来る。サントリーを贈らる、伊藤濱子池田ヨシ来話

○二月二十七日(月)曇ときどき小雪。本の件につき講談社高橋清次に、雑誌寄稿の件につき新潮社の菅原国隆にそれぞれ速達を出す、夕角川書店におもむき窪田啓作の小説集を編むべきことを承諾せしむ、たまたま来り会するもの加藤周一\*矢内原伊作\*串田孫一\*あり。角川われら大雅楼にむかへて小宴

\*加藤周一 評論家、小説家、医師

\*矢内原伊作 哲学者、評論家

\*串田孫一 詩人、哲学者、随筆家

○三月一日(水)晴。新潮社菅原国隆新田敏\*来話。二万円持参す。つぎに出版すべき「新潮文庫処女懐胎」の内容左のごとしといふ報告を受く、山桜葦手張柏端明月珠処女懐胎 編纂及解説は神西清也。この夜 La Peste 読了す。いくさののち原文に就いて読みたる最初のフランスのヌウポータ也。おもしろし。然れども未だ必ずしもわが意に満

\*田中西二郎 翻訳家

\*竹田博 河出書房の編集者

\*賀川豊彦 社会運動家、小説家

\*仏国禪師文殊指南図説 正しくは「仏国禪師文殊指南図譜」。華嚴經入法界品に説かれる善財童子の南遊求法遍歴を絵画化し、これに讀を加えた上図下文形式の版本。宋版が一点、江戸時代復刻版が十数点知られている

\*明板 明版のこと

\*李長吉 唐代の詩人・李賀のこと

\*唐山 中国のこと

○二月十五日(水)曇。高橋清次来。余の風邪見舞としてドリコノと称するもの二壘贈らる。夜窪田啓作来話。カミュ\*のペスト入荷せりと聞きそれを購ふことを依頼す

\*カミュ アルベール・カミュ (Albert Camus)。フランスの小説家、劇作家、哲学者

○二月十六日(木)晴。残雪。井澤義雄来、大学卒業試験明日をはり郷里にかへるよし。伊藤濱子来、角川書店鎗田清太郎来、矢代幸雄著太陽をしたふ者贈らる。夜風邪後はじめて湯を浴ぶ

○二月十九日(日)晴。藤川栄子\*来話、その後援会々員名簿に署名す、女史例に依つて談論風発す

\*藤川栄子 画家

○二月二十日(月)晴。先日より書きかけたる小説草藁夜来藁をついで今朝に至つて成る。夜は夜もすがら三十六枚也、群像四月号に寄せんとす、高橋清次来、すなはち原藁をわたす、田中西二郎来、先日あづけおきたる黄金伝説の抜刷をもどし来る、この日国税局より余が昭和二十四度の収入八十五万円と通知し来る、むちや也、強盗よりも悪質

たず。書き了せて新発明無きもの乎。此の如きをヒューマニズム文学といふなるべし、ただフランスのモラリスムの骨髄なほ揺がざるものあるを見るに至る。Il y a dans les hommes plus de choses à admirer que de choses à mépriser. (P336)「人間には、軽蔑するものよりも賞賛すべきものがたくさんある」この言はたして日本人の場合に当るや否や。ペストはなはだ戦禍に似たり而して日本人のオラン市民に如かざるを悲しむ

\*新田敏 新潮社の編集者

○三月二日(木)晴。日本橋コーヒーハウスにて窪田啓作と会しその作品集の角川書店より出版せらるべきむねを伝ふ。夜はせ川にてのむ

○三月三日(金)晴。白木屋にて Sartre\* : Situations 三冊 Valéry\* :

Pièces sur l'art 及 Mélange を購ふ。三越劇場にて文学座演ずるところの福田恆存作キティ駭風を見物す、招待日にて多く知友に逢ふ、帰途窪田啓作加藤周一中村真一郎\*矢内原伊作岡本太郎\*とはせ川にてのむ

\*Sartre ジャン・ポール・サルトル。フランスの哲学者、戯曲家、小説家

\*Valéry ポール・ヴァレリー。フランスの詩人、小説家、批評家

\*中村真一郎 小説家、文芸評論家、詩人

\*岡本太郎 美術家

○三月四日(土)晴。窪田啓作来話。その短篇集街燈の原藁を持参す

○三月五日(日)晴。安部公房来話。その書くところの壁二百六枚の草藁を示す、あづかりおく、安部とともには高田馬場に藤川栄子を訪ふ

藤川邸にて小酌

○三月六日(月)晴。角川書店に窪田啓作短篇集の草藁をわたす。夜はせ川にてのむ

○三月七日(火)風強く木木をゆるがしてときに雨を吹きつけたり。春

の嵐也。これわが誕生日也。海老名雄二来すなはち小宴を催す。海老名酔臥して泊る

○三月八日(水)晴。河辺健一來、人間に華嚴の続藁を掲載したしといふ。おそらく書くことになるべし。読売ホールにイタリヤ映画靴みがきを観る。よね同伴也、ホールにて藤川女史母子に逢ふ。帰途四人にて有楽町マロンに小憩。またひとりにはせ川におもむきてのむ、座に文藝春秋の若輩数名あり、ビール数本をかたむく

○三月拾日(金)晴。安部公房来。安部とともに小山書店におもむきて二千元受領、内千円を安部にあたふ。安部窮迫きはまれるがごとし、九段近江屋にてビールをのむ。また月曜書房に至り群像高橋清次宛に安部を紹介する手紙を書く、その作壁二百六枚を群像に売りつけんがため也。但この枚数にては長きにすぎてちとむつかしかるべし。月曜書房よりその刊行書二三をおくらる。帰途ひとりにはせ川に至るに徳田

雅彦鈴木亨\*中戸川宗一\*に逢ふ、さらにブーケほか二軒にてのむ、昨日税務署より通知あり昭和二十四年度に於ける余の収入は八十五万円とのことにて税金六十一万何千円を収めよと吹つけか来る。余の昨年度の収入は全部にて約五十万円を越えず悪税ふとどき也。むちやといふべし。相手にするに足らず

\*鈴木亨 詩人、第二次「四季」編集者

\*中戸川宗一 文藝春秋社の編集者

○三月十二日(日)晴。夜毎日ホールにてブランドンの講演を聴く、並びに活動写真大いなる遺産を観る。帰途有楽町にて某酒場に神西清とともにのむ

○三月十四日(火)晴。群像高橋清次紹介にて彫刻師某その作るところの灰皿を売りに来る、愚劣なるもの也。買はずして返す、筑摩書房石

井某\*来話、夜チエーホフ決闘六号室学生を翻訳本にてよむ、決闘も六号室も余少年のむかし読みたるものなれども今日またおもしろし決闘はたしか黒クローズ装の英訳本にて読みたるやうに記憶す ちかごろもの書くことに懶く小説の稟なかなか進まず

\*石井某 筑摩書房編集者の石井立のことか

○三月十六日(木) 晴。井澤義雄東大卒業試験を受くるために神戸より上京し来る。別冊文藝春秋岡富久子\*来 原稟依頼也、菅原国隆来、菅原とともにせ川にてのむ 帰宅炬燵にて夜半ふと起きたるに腰痛にはかに発して歩行に堪へず 謂ふところのギツクリ腰か否か余やうやく老いたるがごとし笑ふべし

\*岡富久子 文藝春秋社の編集者。一般的には富久子と表記

○三月十七日(金) 晴。腰痛をさまる。池田ヨシ伊藤彦子来、池田夫人よりサントリイ一壘をおくらす、両女史とともによね有楽座に映画を観に行く、余こもりみて小説の稟を継がんとすれど筆はなはだ重し筑摩書房石井来翻訳本白鯨二冊を贈らる

○三月十八日(土) 曇のち雨。斯波武\*来、河野通勢\*筆梅花図一幅 狂歌堂真顔\*筆茶釜売画并賛を持参す

\*斯波武 兄・武綱のことか、斯波は石川淳の旧姓(祖父母の家の養子となり石川姓へ)

\*河野通勢 画家

\*狂歌堂真顔 江戸後期の狂歌師、戯作者

○三月二十日(月) ときどき小雨、文藝春秋の招待にて新ばし演舞場にて文楽を観る 忠臣蔵七段目也 諸友に逢ふ はせ川またブーケにてのむ

○三月二十三日(木) 晴。国税局に税金査定の不法不正なることにつき郵書にて抗議を呈出す、菅原国隆来、一万円持参(新潮文庫処女懐

胎印税の一部)新潮社員中野ながしを同伴す これ中野好夫\*長男十九歳にして三日前家出して北海道に赴きたるが帰来せるもの也 菅原に小説南枝向日の草藁三十枚までをわたす、これは書きかけの部分也 菅原中野をつれてはせ川におもむく 菅原をして中野をその父の家に送り行かしむ 留守中窪田啓作来 その小説藁の原藁を置きて去れりといふ

\*中野好夫 英文学者、評論家。信条を異にした長男・好之は西洋思想史学者となる

○三月二十五日(土) 晴。河辺健一来話、井澤義雄草するところのアランの世界原藁六十余枚を雑誌人間編集部にわたしてその掲載方を依頼しおく 河邊ともにはせ川にてのむ

○三月二十六日(日) 雨。ルパン千代来、牛肉を持参す、借金取也、窪田啓作来話 その小説草藁を一閱してかへす、菅原国隆来話、南枝向日の草藁三十一枚より四十七枚までわたす 夜に入つて五十枚まで書き了る、新潮五月号に寄せむがため也

○三月二十七日(月) 晴。菅原に南枝向日の原藁最後の三枚をわたす 夜はせ川にてのむ

上段・南枝向日 五十枚

○三月二十九日(水) 夜はせ川におもむく 清水昆\*に逢ふ 飯寓にかへれば菅原国隆来り待つ 新潮の原藁料を持参したる也 菅原泊る

\*清水昆 漫画家

○三月三十一日(金) 晴。池田夫人よし来話 よねこれともに出づ夕河出書房に至るに竹田博坂本一亀\*、余をさそひてするが台下鰻やすゞきにて小酌

\*坂本一亀 河出書房の編集者

○四月一日(土) 雨はげしく風つよし、小山書店にて二千円領取、夕方

海老名雄二を東日興業に訪ふ、海老名とその仲間森井某立川某ともにも有楽町元八にて小酌、さらに転じて西銀座ブッサン\*におもむくこの酒楼は青山二郎\*の経営に係るものといふ 今日出海\*横山隆一\*らに逢ふ、深夜リントクにて帰宅、海老名同行して泊る

\*ブッサン 他に「ブサン」「ブウサン」などの表記あり

\*青山二郎 装幀家、美術評論家

\*今日出海 小説家、評論家、演出家

\*横山隆一 漫画家

○四月二日(日) 晴、風つよし、別冊文藝春秋岡富久子来りて原藁をもとむ、ことわる、海老名終日あそびてかへる

○四月三日(月) 晴。新潮社におもむきて華嚴書きおろしの件につき酒井健二郎\*と打合せをす、帰途講談社に立寄りて夜は夜もすがらの草藁を取戻す、さらに銀座作品社におもむきて真鍋呉夫\*八十岡英治と語る 夜はせ川にてのむ

\*酒井健次郎 新潮社の編集者

\*真鍋呉夫 俳人、小説家

○四月四日(火) 晴。新潮社と華嚴書下しに關し契約書を取交す、書下し費用のうち三万円受領、雑誌人間に華嚴寄藁の件をとりやめにする ことをつたふ。夜はせ川にてのみみたるに今日出海斎藤十一\*菅原国隆来り会し転じてブーケに行きまたブッサンに行く、菅原とともにむつ子のアパートに車を走らす、至れば座に青山二郎あり焼酎をのみて語る、暁ちかく帰宅、菅原泊る

\*斎藤十一 新潮社の編集者

○四月五日(水) くもりのち雨。華嚴の一部分を新潮に掲載すべき場合について一二の注意を書き新潮社出版部宛に郵送す

○四月七日(金) 雨のち晴。小説新潮小林博来、徳田雅彦来、徳田とともにブッサンに行く、またエスパニオルに行く、三島由紀夫菅原国隆に逢ふ

○四月八日(土) 晴。新潮社新田敏来話、華嚴の一部を新潮に掲載する場合掲載料を支払ふべき旨を通知し来る、神戸井澤義雄より来信、その父の経営するところの旅館不況にて悪税取立のため破滅に頻すと報じ来る

○四月九日(日) 晴。おとしばなし和唐内二十三枚脱藁。小説新潮に寄せむがため也。夜徳田雅彦酒を提げて来る、歓談数刻

上段・おとしばなし和唐内 二十三枚

○四月十日(月) 晴。おとしばなし和唐内を小説新潮にわたす、小林博菅原国隆新田敏とはせ川及コトンにてのむ

○四月十一日(火) 晴、安部公房来話、夜はせ川におもむき三好達治\*徳田雅彦と逢ふ

\*三好達治 詩人

○四月十二日(水) 晴。松坂屋にて検印を註文す、はせ川にて小酌

○四月十三日(木) 晴。菅原とともに熱海におもむき起雲閣本店に至る、ときに夕五時半に垂んとす、温泉を浴びて出で来るにサイレンの音かまびすしく窓硝子にあたつて炎の色あきらかかなり、火事也、難を魚見崎に避く、かへりみれば熱海全市猛火さかり也、すなはち徒歩にて鏡浦をへて伊豆多賀に至り電車にて伊東におもむく、伊東駅にてたまたま坂口安吾\*夫妻に逢ふ、坂口は、けだし火事見物也、暖香園に泊る

上段・熱海より伊東へ

\*坂口安吾 小説家

○四月十四日(金) 晴。坂口安吾とともに伊東市中のてんぷら屋にて小

酌、菅原帰京す。昨夜熱海の火車は目貫の通二千戸を焼くといふ

○四月十五日(土)晴。よね暖香園に来る。伊東を出発して途中下車にて熱海に立寄りたるに四周焼跡の中に起雲閣のこりみたり、すなはち小憩してビールをのみ つまみものハムサラダコーヒーなど命じたるに勘定はこのつぎにといふ宿の挨拶也 なかく、商売上手也 一泊せむとはおもへど電気水道ともに止りみたれば帰京す このごろ野中昭子といふ未知の女しきりに手紙を寄こす 文学少女なるべし

上段：熱海より帰京

○四月十七日(月)晴。文芸家協会より全国書房の印税を取立てたるもの一部を送り来りたればこれを受領す 夜はせ川にて檀一雄菅原国隆新田敏とのむ 檀よりその著りつ子その死を贈らる、中戸川宗一岡富久子来り会す転じてエスポール\*におもむくに宇野千代\*北原武夫\*紀国屋書店主人に逢ふ 夜ふけ帰れば海老名雄二来り待ちつつあり、海老名泊る、この日月曜書房より岡本かの子\*母の手紙を岡本太郎署名にて贈られたれどもエスポール\*に取上げられたり

\*エスポール 他に「エスポール」などの表記あり

\*宇野千代 小説家

\*北原武夫 小説家

\*紀国屋 紀伊国屋書店の表記は、他に「紀之国屋」「紀ノ国屋」「紀の国や」など

\*岡本かの子 小説家、岡本太郎の母

○四月十八日(火)晴。海老名かへる、岡富久子来話、東京日日新聞茂木某女来話、ともに原稟依頼也、新聞には書くつもり無し、某女腕づくなら負けせんわと、女子の武勇おそるべし

○四月十九日(水)晴。神戸より井澤義男雄来。井澤とともに六甲におもむくことゝす。文藝春秋新社及河出書房に立寄り夜銀座はせ川にて

のむ 菅原国隆新田敏中戸川宗一鈴木享ら相会す、新田敏よりジイド

全集背徳者の件につき報告を受く、夜十時三十分発大阪行列車に乗る、この日三省堂にて註文せる検印出来上る。このたびの神戸行は井澤の要請に係るものにて兼ねて別冊文藝春秋の原稟を書くため也

上段：神戸行

○四月二十日(木)晴。朝神戸着。ゆり屋におもむく。これは井澤の兄が新開地聚楽館にて経営するところの食堂也。島尾敏雄\*を呼ぶ。井澤と三人にて東亜ロードの喫茶店オルゴルに行き、また福原のお好み焼ごんやにてのむ、福原はもとの遊郭なれども焼失後の今日にては尋常安待合ふうの家はかなき軒を並べたり、夕五社花壇に着く、この旅館経営難にて且重税に苦しみ井澤の父煩悶してほとんど自殺をはかる危険ありといふ、いづこも安き地無し

\*島尾敏雄 小説家

○四月二十一日(金)くもり小雨。島尾敏雄富士正晴\*五社花壇を訪ね来る。置酒歓談。両名泊る。佐々木基一\*にはがきを遣る。昨日別冊文藝春秋宛に電報を打ちたり、チハヤフルコウベニツケバオソザクラ

\*富士正晴 小説家、詩人 通常は富士と表記、ただし本姓は富士

\*佐々木基一 文芸評論家

○四月二十二日(土)晴。五社花壇にして島尾富士兩人朝にかへる。奥山裕来話。井澤とともに酒を酌む。しかるにこの夜井澤の父急逝す。死因は肝臓のよし、衰弱はなはだしくして手当の効なかりしがごとし、無常迅速といふべし、香奠二千円を呈す。

○四月二十三日(日)晴。神戸に出で元町風月堂にて菓子折をととのへ井澤の父の霊前に供ふ。夜ゆりやにてのむ

○四月二十四日(月)くもり雨。五社花壇にて井澤の父の告別式に列す。

三田サンタにて火葬に附するよし也、夜義雄より井澤家の内状を聴く

○四月二十五日(火)晴。前夜雨にて瀧の音雷のごとし。午後五社花壇を発して東にかへる。ゆり屋にて夕食。この行失費多くして原稟成らず わづかにのこれるは借金のみなり呵々

○四月二十六日(水)晴。午前九時品川着。家にかへれば海老名雄二座にあり、前夜むつ子愛子とともに酔つて襲来し泊りこみたるもの也、菅原国隆来話、安部公房来話 安部はその作品壁第二部を持参す、原稟売れず就職でもすべきかなどと語る、帰京すれど爰元もまたあわただしきことども也

河出書房坂本一亀に文学大系の検印をあげおく

上段：神戸五社より帰京

○四月二十七日(木)晴。夜文藝春秋別冊徳田雅彦の案内にて小石川もみぢに泊る。そのまへにブツサンにて借金を支払ひむつ子愛子に対し先夜我家にどなりこみたる非礼をなぢりその罪を謝せしむ

○四月二十九日(土)晴。夜来もみぢにて小説の稟を草し曉に成る。瀧のうぐひす二十枚、徳田雅彦にわたす もみぢを出で神戸にて万年筆を購ひ帰宅

上段：瀧のうぐひす 二十枚

○五月一日(月)晴。安部公房来 その小説草稟壁第二部を批評して返す、中央公論社長島中鵬二\*来、原稟依頼也、約束せず、文藝春秋にて瀧のうぐひすの謝礼を受けはせ川にてのみ末広の牛肉をみやげに帰る

\*島中鵬二 正しくは「嶋中」だが、以降も「島中」と記述。

○五月三日(水)雨。夜来銀座にてのみ小石川もみぢに泊り夕方帰宅。大酔戒しむべし帽子をどこかに落したり 昨日安部公房その小説壁第二部の草稟を書直して持参す 安部は先日追剥に逢ひかへつて賊のの

どを絞め腕の骨を抜きたりといふ

○五月四日(木)雨のち晴。鈴木貢来話。文学界の原稟依頼也 鈴木ともにはせ川にてのむ

○五月六日(土)曇雨もよう 河出書房竹田博 文学大系の検印並に検印請取証を届けに来る、夕作品社にて八木岡英治と将棋をさす はせ川にて鈴木貢と逢ひエスポールにおもむく、そこにて河出書房主人と逢ふ また中村正常\*弟ながしと逢ふ 先夜忘れたる帽子をせい子がかへしてくれる

\*中村正常 劇作家、小説家

○五月七日(日)晴。三越本店にて二科会春季展覧会を観る 見るべきもの無し、伊藤はま子\*女史来話コーヒーを届けらる 角川書店の飯田橋附近に移転せるよしを聞く

○五月八日(月)曇。文学界の原稟執筆のため築地三田におもむく 鈴木伏島徳田及ブーチャンとともにのむ

○五月十日(水)小雨くもり。夜来築地三田にて「篠舩」第一章十四枚書く 文学界六月号掲載のもの也 続稟は七月号に延ばすことゝす 三田を出でて夜はせ川 サントリーバー、エスポールにてのむ 同行鈴木徳田及矢内原伊作也

○五月十一日(木)晴。新潮社にて二万円受領。華嚴書下し費用の一部也。窪田啓作とともにせ川におもむく 菅原国隆新田敏あとより来り三島由紀夫また相会す

○五月十三日(金)晴。昨夜はせ川にてのみブウサンにてのみ大酔前後忘却 築地三田に泊り今日午後にかへる 横浜の山下夫人といふものはじめて来る、よし来話、夜片山修三\*とはせ川にて語る

\*片山修三 小説家から出版、編集者として「思索」を編集発行。思索社を興す

○五月十五日(月)晴。作品社にて八木岡と将棋をさす はせ川にてのむ  
○五月十六日(火)晴。夜はせ川にて菅原国隆に逢ひともにエスポール  
におもむく 連夜の酒に疲れたり

○五月十七日(水)晴。河出書房竹田博現代日本文学大系別冊第一巻の  
成れるを届け来る これは余が作無盡燈ほか四篇を収録したるもの也  
竹田京都大学法科を卒業したるよしなれどもその経歴を聞くに即ちこ  
れ銀座のテキヤ也 安部公房来話ともにはせ川に赴きてのむ

○五月二十日(土)雨。山下夫人来話、夫人とよねとを携へてはせ川に  
て晚餐

○五月二十三日(火)曇。昨夜はせ川にて海老名雄二に逢ひともに葭町  
巳の家に泊り今朝帰宅す、文芸家協会より全国書房支払の印税内金若  
干を送り来る 角川書店におもむき角川源義に逢ひ小山書店におもむ  
き高村昭に逢ふ たまたま安部公房来り会す すなはち安部及び塩  
出和子後なにがしを伴ひて飯田町某店にてビールをのむ、安部は税金  
七十五円を督促されこれを支払ふこと能はず税務署員やむをえず月給  
にて立替へておきますといひたるよし也 夜はせ川にてのむ、文藝春  
秋社員の話に坂口安吾熱海の火車につきて雑文を書き余の名を引合に  
出したりとつたふ 菅原国隆はせ川に来る、これを携へて築地三田に  
て小酌

○五月二十四日(水)晴。中央公論社長島中鵬二来話。夜鈴木貢とはせ川  
にて逢ふ、熱海行の相談をす、帰途銀座通にてビンゴゲームをこころむ

○五月廿六日(金)晴。夜徳田雅彦とはせ川にてのみ深川に車を走らせ  
て宮川におもむく 宮川のうなぎ久しぶり也 この店戦後の普請なれ  
ども雅趣あり曼魚老人\*に逢ふ 老人と語ることもまた久しぶり也

\*曼魚老人 宮川曼魚のこと。随筆家、江戸文化研究者

○五月廿三日(土)曇小雨。一日より鈴木貢案内にて熱海古屋に泊り今日  
帰京 文学界の統稟執筆のためなれども稟成るに至らず 夜はせ川に  
て鈴木及徳田雅彦と逢ひさらにノンシャランス\*におもむきアヤを伴  
ひ四人にて深川宮川にて晚餐 また銀座にもどりエスポアルにて小宴  
連日の酒にいささか疲れたり

\*ノンシャランス 他に「ノンシャラン」などの表記あり

○六月五日(月)晴。夜来小説篠船の稟を書きつぎて今朝やうやくなる。  
文学界六月号の続篇也 通算して四十四枚。これを鈴木貢に手交す。  
村口書房におもむき先日見おきたる慊堂句掖齋書の幅をあがなふ。帰  
途銀座はせ川にてのむ

上段…篠船 四十四枚

○六月六日(火)晴。銀座はせ川にてのみそれより巖谷小波四男大四\*  
を供にしたがへて新ばし某茶楼にのむ これインチキ酒場也 此日ア  
メリカンミリタリスムに依る共産党弾圧はじまり徳田球一野坂参三ら  
二十余名公職追放さる 深夜帰宅すれば海老名雄二来り泊するに逢ふ  
窪田啓作留守に来れるよし

\*巖谷小波、大四 小波は小説家・児童文学者、大四は河出書房の編集者を経て  
文芸評論家

○六月七日(水)晴。海老名雄二午後かへる 安部公房来話その原稟  
三十枚持参す佳作ならず安部に蠟石を購ひて蔵書印を作ること依頼  
す 夜安部とともにせ川にてのむ

○六月八日(木)晴。文芸家協会より全国書房の印税の一部を送り来る。

○五月廿七日(土)雨。山下夫人すみ来話。神田におもむきて村口書房  
を訪ふ。書幅あり、慊堂\*句掖齋\*録するところ也 句に云 鉛槧図書  
日廣従容之趣安排花卉時観榮落之情 二大家の高風掬すべし これを  
購ふべきことを約す 他に永徳\*蕪村\*の軸を見る 永徳はいかり天神  
の図にてめづらしき小品也\* 今月は余の行状いさゝか酒にみだれた  
るに茲にこれらの書画を観て目をそそぎたるこちす 然れども悪癖  
未だ止まず帰途またはせ川にてのむ 笑ふべし

\*慊堂 松崎慊堂。江戸時代後期の儒学者  
\*掖齋 狩谷掖齋。江戸時代後期の考証学者

\*永徳 狩野永徳。安土桃山時代の絵師、狩野派を大きく発展させた。「いかり天  
神」とは、菅原道真を祀る天神信仰が盛んとなる中で天神像が描かれ、初期は  
表情に道真の怒りを表現しているものが多く、その図様を引き継いだ画題

\*蕪村 与謝蕪村。江戸中期の俳人。文人画もよくした

\*この村口書房で観た書画類に関しては「乱世雑談」(「夷齋俚言」)に言及あり  
○五月二十八日(日)曇をりをり小雨、梅雨のまへぶれなるがごとし  
新潮文庫版処女懐胎の校正を閲したる

○五月二十九日(月)曇。銀座松坂やにて時計修繕成りこれを受取り、  
はせ川におもむく、井伏鱒二\*に逢ふ、太宰後家八雲書店の土地建物  
を未払印税の代りとして取上げ名義書替へたりと井伏の話也 徳田雅  
彦とともに三田におもむきてのむ、食膳に鮎出てたり但うまからず

\*井伏鱒二 小説家

○五月三十日(火)うす曇。戸石泰一津田直紀来話、戸石は失業津田は  
雲州松江に落ち行くところにも貧棒<sup>びんぼう</sup>ばなし也 津田に饒別をあたふ

○五月三十一日(水)晴のち小雨。新潮社にて華嚴書下し費用を受領す  
河盛好蔵\*と語る 新田をしたがへてはせ川におもむく 三好達治大

角川源義ヤリ田某をしたがへてはせ川におもむく。窪田啓作を招きて  
角川に紹介す。たまたまよねヨシ来り会す。帰途窪田及び女ふたりと  
ともにビンゴゲームをこころみ三たび賞にあたる。アマンドに小憩し  
てかへる。この朝小説新潮小林博来、小説依頼也

○六月九日(金)雨。作品社より三島由紀夫小説集燈台を贈らる。はせ  
川にてのむ。帰途ビンゴをこころみ缶詰あたる

○六月十日(土)雨。山下夫人すみ来話。翻訳本チャタレイ夫人の恋人  
を読む

○六月十二日(月)雨。小山書店にて三千円受領。窪田啓作と日本橋の  
喫茶店にて語る。窪田の娘まき子七歳は北川の息子とともに笈田幸吉\*  
の同門にて天才少女なるよし。夜はせ川にて井伏鱒二中島健蔵\*永井  
龍男河盛好蔵と会飲す、また塩出和子に逢ひ花馬車にて小憩す

\*笈田幸吉 おそらくピアニストの笈田光吉のこと

\*中島健蔵 文芸評論家・フランス文学者

○六月十五日(木)晴。兼坂ビルにて試写ジャンダルクを観る 夜永井  
今河盛浦松らと築地三田にてのむ

○六月十六日(金)晴。竹田博河出来小説大系の印税一部を持参す 神  
田の某茶房にて竹田とともにのむ 山本書店にて古詩源\*及天工開物\*  
を購ふ 帰途銀座にてネクタイを買ふ はせ川にて井伏河上と逢ふ

\*古詩源 中国清代の沈徳潜が「唐詩別裁集」に続き編集した先秦から隋までの  
詩の総集

\*天工開物 中国明末に宋応星が書いた産業技術書

○六月十八日(日)楳雨すこしく晴る 華嚴第九章を書く 夜窪田啓作  
中村真一郎矢内原伊作来話歓談数刻

○六月十九日(月)晴。三鷹禅林寺にして桜桃忌におもむく盛会也 帰

途はせ川にて河上徹太郎\*に逢ひ吉田\*にてともにのむ 松村良一とビ  
ングをこころむ 二回あたる

\*河上徹太郎 文芸評論家

\*吉田 他に「よし田」などの表記あり

○六月二十日(火) 雨のちくもり。作品社におもむき社長山内文三に逢  
ひ太宰全集出版のことにつきて話す 栃木営業八木岡編集立会ふ 帰  
途はせ川ノンシヤランプツサンにてのむ 三島由起夫より其著怪物を  
贈らる

○六月二十一日(水) 晴。作品社にて太宰全集続刊の件を承諾す 檀一  
雄に逢ひスエヒロ及はせ川にてのむ

○六月二十二日(木) 晴。文藝春秋新社の銀座五丁目に移転したるにつ  
きその社屋を見に行く 文学界七月号を一閲するに篠船続稟の「二二  
三二」とあるべきところを恣意に「二二二」と掲りかへたるを発見せ  
り すなはち抗議書を提出す 社員数名とはせ川におもむきまたノ  
ンシヤランに立寄りさらアヤをひきつれて三田に至つてのむ 連日昏  
酔わが生活もまた乱れたるかな。この日山形沢渡恒\*より桜桃一箱を  
贈らる。応酬ひらくより桜桃箱をこぼれたり。また太宰全集続刊の件  
につき津島美知子\*に書を遣る

\*沢渡恒 詩人、作家

\*津島美知子 太宰治夫人

○六月二十三日(金) 晴。はなはだ暑し。角川書店におもむきその新刊  
書三冊を贈らる。新潮社に至り菅原新田をひきつれて銀座に出ではせ  
川にてのむ。帰途ウエストにて小憩するにその給仕の女の平峯満\*が  
女なることを知る この日小山書店より代表作全集の印税を送り来る  
\*平峯満 「三田文学」に戯曲等を寄稿、帝国劇場に勤める

鮮に上陸す 戦乱の機迫れるに似たり  
上段..



\*この蔵書印については「安部公房君鑄印」(一九五五年六月俳優座公演、安部公  
房作「どれい狩り」プログラムに「安部君について」として寄稿、「文藝」同年  
十二月号に再掲、六〇年「夷齋譚舌」収録時に同題)に詳しい

○七月三日(月) 晴。新潮社新田徹来話、文庫本処女懐胎の成れるを持  
参したる也 京都金閣寺馬鹿書生の放火のため炎上せるよし

○七月五日(水) 晴。戸石泰一小山清来話、太宰全集続刊の件につき報  
告に来れる也

○七月六日(木) 晴。夜来おとしばなし列子の稟を書きつぎて暁に成る、  
二十六枚也、新潮社におもむきて小説新潮小林にこれをわたす。夕五  
時より文藝春秋社にて文学界主催のビールの会に列席す 三島由紀夫  
に逢ふ

上段..おとしばなし列子 二十六枚

○七月九日(日) 晴。夜来海老名雄二筒井久太郎来話二人とも泊る。福  
田恆存岡本謙次郎\*来岡本よりその著ルオーを贈らる、海老名ととも  
に目黒八芳園におもむく これ久原房之助とやらいふものゝ旧宅なる  
よし その規模の貧弱料理のまづきこといはん方なし しかも房之助  
園内の一部に恋々として居住すといふ その目論見のいやしきこと唾  
棄すべきもの也 海老名また泊る

○六月二十四日(土) 晴。小山清来話、津島美知子の使者としてネクタイ  
を届けに来れるなり、ネクタイは太宰治が生前着用せる結城紬の裂  
地をもつて作りたるものにてけだし形見分なるべし  
○六月二十五日(日) 晴。北鮮の兵隊三十八度線の堺を越えて南鮮に侵  
入す。いくさふたゝび来らんとす

\*前田順敬 前田純敬(小説家)のことか

○六月二十七日(火) 晴。今朝北鮮共産軍京城に攻め入つてこれを占領  
すつたふ。新潮社より文庫版処女懐胎の検印紙五千枚送り来る。夜  
銀座はせ川におもむき漫画家横山隆一泰三兄弟と会飲す

○六月二十八日(水) 雨。新潮社に文庫の検印をとゞける。角川書店に  
立寄り近江屋にてビールをのむ。夜美術クラブにして井伏鱒二の会に  
おもむく。神楽手妻などありて盛会也。帰途銀座にてのみ電車を乗越  
して横浜に至り日本橋待合かねたに泊る

○六月二十九日(木) 雨。かねたを出て支那町の料理店華勝楼に小憩す  
みやげを買ひて帰る 山下夫人すみ来たばこを届けに来れる也 夜八  
木岡英治来話 将棋をさす

○六月三十日(金) 晴。銀座に出で松坂やにてシャツを買ふ はせ川に  
て小酌 井伏鱒二に逢ふ 夜菅原国隆来話 朝鮮の風雲益々急也 ア  
メリカの海軍空軍出動す

○七月一日(土) 晴。巖谷大四竹田博田中西二郎来話、安部公房来その  
鉄筆をふるひたる印を持参す 印やや大に過ぐ 洋書に捺すべき蔵書  
印ともなさばなすべし、安部とはせ川におもむき小酌 アメリカ兵朝

\*岡本謙次郎 美術評論家

○七月十一日(火) 晴。菅原国隆来、新潮にエセエを連載することを依  
頼さる 夜ひとり銀座にてのむ

○七月十二日(水) 晴。小雨あり。角川書店鎗田来。神西清の消息を聞  
く、また窪田啓作の病めることを聞く。銀座はせ川の女あるじ中元の  
挨拶に来る。ふるしき並に玉木屋のつくだ煮を持参す

○七月十三日(木) 雨。夜はせ川にてのむ。新古今集宮内卿の歌に 聞  
くやいかにはうはの空なる風だにも松に音する習ありとは\* 天明狂歌  
はこの技巧をうばひたるもの也 心づくまに記す また戦後フラン  
スに literature engagée\*の語あり 意味の文学と訳せば如何 一般  
に芸術家は物を作る しかるにこれは物についてその特定の意味を描  
くもの也 あるひはアンガアジェを直訳して質に取られた文学とでも  
いふか契約文学なるべし 方法論的には意味規定の文学也 芸術家は  
物を作る、作品は物とかがへられたれども今や小説はむしろエネル  
ギーに似たり 世界観をうごかすもの也 小説家は芸術家なんぞには  
非ず 小説の敵はもはや芸術には非ずして物理学也(物でありまた同  
時にエネルギーたらんとす 孤独と解放―分裂 無理の場)

\*文中傍線2カ所は赤鉛筆

○七月十四日(金) 晴。プツサン岡野某来、中元の挨拶かねて借金の催  
促也 夜はせ川にてのむ 三好達治河上徹太郎に逢ふ

○七月十五日(土) 晴。新潮社大田美和来この女子は実践国文科出身に  
して菅原国隆の恋ひわたるところのもの也 河出書房竹田博来小説大  
系の印税を持参す 竹田をしたがへて銀座はせ川にてのむ

○七月十六日(日) 晴。邦訳エーリヒ・ケストナー「エミールと軽わざ  
師」新潮社こども本を読む、さしたることも無き本ながらこの筆法を



もつてコミュニケーション少年物語を書かばおもしろかるべしとおもふ

○七月十七日(月)晴。窪田啓作来話。かねて Albert Camus : L'Étranger を借覧したきむねをいひたるにその本を持参して示さる。窪田頭痛にて銀行を休み静養中なりといふ。夜はせ川にのみ河上徹太郎に逢ひともプウサンにおもむく乱酔。言語道断またしてもわが生活のみだれわれながら目もあてられず

○七月十八日(火)晴。炎暑書を読むにものうし、菅原国隆新田敵来話、菅原伊東におもむき坂口安吾をたづねたるに坂口のペニシリン病回復せりと語る。余けふより数日酒をしりぞけてなにか書くことに決心すしかるに夕刻菅原国隆ふたゝび来る、すなはちこれをたづさへてはせ川におもむきて小酌。夜和田傳\*と閑談。朝鮮の戦局アメリカに非なることをいひて大笑す

\*和田傳 小説家

○七月二十日(木)晴。文芸家協会より全国書房の印税の一部を送り来る。講談社におもむき高橋清次に逢ひ福永武彦\*安部公房の原稟の件につきて話す、帰途文藝春秋社に寄りて鈴木貞と銀座にてビールをのむ。夜に入つてひとり深川におもむき宮川にて小酌す。曼魚子に逢ひ

「七拳図式」\*を示さる

\*福永武彦 小説家、詩人

\*七拳図式 江戸後期の滑稽本、西村源六著。竹林の七賢の名を呼んで勝負する拳

○七月二十一日(金)晴。新潮大田美和来話、菅原より大田に托してカナディアンクラブ一壘贈らる、角川書店鎗田来話、山下夫人すみ来よね夫人とともに白木屋におもむき放出物資あれこれ購ひかへる、余終日家居カミュ・レトランデ読了、おもしろし、然れども余はむしろペストを探らむ。但ペストと比較して論ずるは当らず。この原文甚

だ平易にしてペストよりも読み易し

○七月二十二日(土)晴。夜はせ川にて徳田鈴木鷺尾中戸川と相会しとも新宿道草お梅の店におもむく。お梅狡猾にして勘定べらぼう也

○七月二十四日(月)晴。菅原国隆来話、原稟依頼也、夜はせ川におもむきたるに坂口安吾あり。文藝春秋社員とともに小岩なる東京パレスに行かむとするところ也といふ。けだし安吾巷談のために探訪記事を取らむとするもの也。すなはちその自動車に同乗して小岩に向ふ。林芙美子\*もまた同行す。東京パレスは田圃の中にあり元精巧社女子寮の建物にして今日は売笑婦の巢窟なれどもそのうすぎたなきありさま宛然書生の寄宿舎に似たり。娼婦の数は百七十人にして夜毎に三十人づつ附属のダンスホールに出場すといふ。すなはちホールを見物すバンド五人客まばらにて貧弱笑を発せしむ。ダンスは九時に終りそれより娼婦の部屋に入る、余が敵は三棟三十番の京子にして大正九年生三十歳と聞く、一時間ほどゐて一同引揚ぐ、この東京パレスには永井荷風\*をりを通ひ来るとぞ、パレス内部には焼鳥屋喫茶店すし屋髪床まで軒をならべ場末の市場に似たり。小岩は蚊の名所にて一に蚊岩といふとか

\*林芙美子 小説家、詩人

\*永井荷風 小説家

○七月二十五日(火)晴。夜はせ川にて徳田雅彦鈴木貞と逢ひさらにバア二軒をのみあるく。朝鮮のいくさにアメリカ軍しきりに負けつづく。日本の運命いかゞなるべきか考へてもどうにもならぬことだけは明白也

○七月二十六日(水) \*菅原国隆大田美和来話、原稟依頼也、加治木智種よりビール・ダースを贈らる、加治木の草したる実話海賊物語を文藝春秋に紹介したるにつきその謝礼也。すなはちMJB一缶を加治木

に贈つて返礼とす。朝鮮のいくさはアメリカ軍の敗北ほとんど必至なるがごとし。いよく乱世をたのしむほかに策無し。小国の人民の窮極の権利なり

\*この日は天気の記事なし

○七月二十七日(木)昼晴。安部公房来話、ともにせ川におもむく夜に入つて雨。はせ川にて坂口安吾徳田雅彦鈴木鷺尾洋三に逢ふ。坂口伊東にかへる。帰途安部徳田並びに遅れて来れる菅原国隆を伴ひて新ばし与平にて小憩。菅原高輪まで送り来る。新潮のエセエ執筆を断りたるに依つてふたゝび催促のために来れる也

○七月二十九日(土)夜来大雨。朝鮮のアメリカ軍今や敗色明か也。昨夜おそく海老名雄二来一泊。今夕に至つてやうやく辞去す。夜はせ川にてのむ。菅原国隆大田美和来り会し原稟催促しきり也

○七月三十日(日)晴。二日ふりつゞきの雨はれたり。各所に出水のよし、菅原国隆来話。新潮にエセエを書くことを依頼されれども実際には九月号より今年末までわづか四回にして連載と称しながらその実ともなはず意にみたざればこれを書くに張合なくすなはち執筆をことわる、菅原釈然たらざる色あり、やむをえざる仕儀也

○七月三十一日(月)晴。作品社におもむき八木岡英治と将棋をさす。夜はせ川にて三島由紀夫鈴木貞らと逢ひさらにエスポールにてのむ。昼角川源義来。角川文庫にて太宰治斜陽を出版するにつき余の太宰治昇天を収録したしといふ。すなはちこれを許す

○八月一日(火)晴。文藝春秋社におもむきたるに坂口安吾先日の小岩のあそびを安吾巷談に書き実名人にてあらぬことをも口走りたるよし。池島信平\*の話也。安吾の悪癖こまつたやつ也

\*池島信平 文藝春秋社の編集者

○八月二日(水)晴。田中西二郎来つてその訳著メルヴィル白鯨を示す、しかるにその書に伊藤整\*の序文ありて田中の略歴を記し中に余の森鷗外に田中の思考のあとありといへり、いやなきもちを禁じがたし、余の森鷗外には田中の思考のあと無し、余と田中とはことごとし意見相反す、鷗外を論ずるにあたり部分的には結果として見解の一致することはあれども思考の筋道はたがひに相違す、その相違が余と田中との個人的附合の場なりき、伊藤この消息を知らずしてみだりに暴言を吐く、ほとんど中傷に似たり、しかもこれを田中の訳著に記載するに至つてはむちや也。余が森鷗外の論稟を草したる当時田中は単に鷗外全集を他より借りるために奔走の労をとりたるに止まる。伊藤の言事実に当らず、右につき田中より釈明ありたれども余心中に釈然とせず、本はすでに発売中なれば如何ともしがたし、田中辞去のち直ちに田中宛にはがきにて絶交をいひやる、此の如きもの出入さしとめ也、あと味よからず、人間附合めんどう也

\*伊藤整 小説家、詩人、文芸評論家

○八月三日(木)雨。夜徳田雅彦鷺尾洋三とはせ川ノンシャランブーケにてのむ。豪雨に濡れてかへる

○八月四日(金)雨。高橋清次来話。河盛好蔵よりその翻訳本二十五時を贈らる、これルーマニヤ人ヴィルゲル・ゲオルグウの小説也

○八月五日(土)晴に向へるかとおもふに夜に入つてまた雨なり。夕方銀座に出でんとしてバスに乗りたるに八田元夫\*に逢ふ。新協劇団に属するよし。はせ川にて河上徹太郎井上流はん\*を携へ来り歓談数刻

\*八田元夫 演出家・劇作家

\*はん 上方舞の舞踊家、武原はんのことと思われる

○八月七日(月)晴。講談社高橋清次来、ともに深川宮川におもむく

女中梅といふものとぼけたやつにておもしろし 本名新井光 浅草富士学校出身のよし 宮川にて座敷のあくのを待つ間に八幡境内にある 昔日のおもかげ無し 帰途はせ川に寄る 灘万はんに逢ふまたノンシヤランに寄る あやと新ばしにてそばを食ふ この日菅原国隆来 話 新潮にエセエ執筆を依頼さる

○八月八日(火)晴。高島屋にて欧米絵画展覧会を観る。おほく小品にして中につきレバルクの裸婦色彩みごと也。事務所にて読売新聞社員と語る。アメリカは共産党弾圧に夢中なれども絵はヘタクソ也といひて笑ふ 帰途文藝春秋に立寄り徳田鈴木中戸川印南とはせ川にてのむ 菅原新田その場に在り群像川島また来り会し閑談数刻

○八月十日(木)晴。原稟筆すすまず夜またはせ川にてのむ、島中鵬二と逢ふ、徳田雅彦とノンシヤランにて小酌

○八月十八日(金)晴、夜来小説の稟を書きつき今朝やうやく成る、妖女五十二枚 群像大久保の来れるにこれをわたす群像十月号に寄するもの也 窪田啓作来談数刻 夜はせ川におもむく 徳田雅彦鈴木貢とロータリー及エスポアルにてのむ エスポアルにて十二時すぎにアメリカ人三名押込に入り来る北原武夫とともにこれを逐ふ 徳田来泊 上段…妖女 五十二枚

○八月二十一日(月)曇、褥暑はなはだし、菅原国隆来安部公房来、夜はせ川にてのむ 中島健蔵清水昆永井龍男三好達治と逢ふ けふ安部とはもつばら画の話にてガッシュフロタージュにつきて論ず しかるに夜はまた清水昆とは日本画の話になれり

○八月二十二日(火)晴、群像高橋清次来原稟料持参す 夜はせ川におもむく 池島信平ほか井伏三好河上と逢ふ

○八月二十九日(火)曇小雨、夜来牛込二葉荘にて面貌について(夷齋

筆談一)を脱稟三十枚 いくさののちはじめて書きたるエセエ也 二葉荘にてはじめて久保田万太郎\*に逢ふ、前夜窪田啓作来 窪田サルトルの翻訳を新潮に寄すといふ 余の筆談もまた新潮に連載すべきもの也

上段…面貌について 三十枚 夷齋筆談

\*久保田万太郎 小説家、劇作家、俳人

○八月三十日(水)曇のち晴。角川源義来角川文庫より太宰治斜陽を出版せるにつきその一部を届け来る 角川の話に堀辰雄\*危篤におちいりたれどもやうやく一時の急を取止めたるよし 角川とともて作品社におもむき八木岡英治と将棋をさす 夜徳田雅彦鈴木貢とはせ川ロータリー吉野鮎エスポアルとのみあるく

\*堀辰雄 小説家

○八月三十一日(木)晴。新宿紀国屋にSartre : Les mains sales, Alain\* : Les Dieux ; Avec Balzac, Julien Benda\* : Songe d'Éleuthère を購ふ、帰途はせ川にて小酌 この朝中央公論社社長島中鵬二来原稟依頼也

\*Alain アラン。フランスの哲学者、評論家(本名…エミールオーギュスト・シャルティエ)

\*Julien Benda ジュリアン・バンダ。フランスの哲学者、小説家

○九月一日(金)晴。上野美術館にして二科会展覧会におもむく。会場事務室にて東郷青児\*藤川栄子野間仁根\*安部公房と逢ふ、帰途安部夫妻をたづさへてはせ川にてのむ、さらに藤川栄子を高田馬場なるその家に訪ふ 酒を酌みて深更におよびやうやくかへる

\*東郷青児 野間仁根 ともに洋画家

○九月三日(日)晴。昨日小石川もみぢに泊りて今日かへる。一日

酔ひ臥して日ごろの疲労をわすれたり 閑にジャン・コクトオ「*difficile d'être*」を読むにこれまた一篇の好読物なりき、コクトオ五十一

代を過ぎて死のはなはだ遠からざることを感ずといふ、コクトオは一八八九年の生れなり、余一八九九年をもつて生る、コクトオが五十一代を過ぎたるとおなじ度合にて余は四十代を過ぎたり 余性疎懶いまだ死の近づけることをおぼえず 茫々然として白昼の夢にふける 笑ふべきのみ

○九月四日(月)晴。昨日ジェーン駱風といふもの阪神地方をおそひたりと聞けど今朝東京の空爽かなり。中央公論社女記者二名来、原稟依頼なり、夜文藝春秋の徳田鈴木田中戸川と銀座より新宿にわたつてのむ

○九月五日(火)晴。新潮社新田敏来、森鷗外集一冊の監修を依頼さる、河盛好蔵もまたこれに参画するよし、短篇の稟を起したれども遅々としてすすまず

○九月七日(木)晴。河出書房竹田博来 島尾敏雄の書下し小説三百枚を持参して閲読を乞はる、あづかりおく、夜はせ川にて小酌

○九月十二日(火)曇小雨。駱風来らんとして方向を転じ九州の方に襲ひ行くらしとつたふ。先日より小説の稟をおこしたるが けふ深夜におよんでやうやく成る。稟二十八枚。別冊文藝春秋に寄せむと欲す

上段…稟 二十八枚

○九月十三日(水)晴。文藝春秋別冊に稟をわたす。夜檀一雄徳田雅彦鈴木貢ほか数名と銀座にてのむ のむこと数軒にわたつて深夜にかへる

○九月十四日(木)晴。河出書房竹田博に島尾敏雄書下し原稟をかへし てそれを出版すべきことをいふ、神田におもむきて岩波書店にて理化学辞典ほか二冊を購ふ 帰途銀座にて三原及はせ川にてのむ 時事通

信にて井上勇のアメリカにおもむけることを聞く

○九月十六日(土)晴。三越劇場にて俳優座所演令嬢ジュリーを観る。千田是也\*の一人芝居のみ。事務所にて久保田万太郎伊藤熹朔\*に逢ふ。帰途小林秀雄\*三好達治井伏鱒二河盛好蔵永井龍雄と新ばし若竹およびカーボンにてのむ 昨十五日夜は坂口安吾檀一雄と銀座にて数軒にわたつて痛飲 このところ酒と縁は切れざるがごとし

\*千田是也 演出家、俳優

\*伊藤熹朔 舞台美術家、美術監督。千田是也の兄

\*小林秀雄 文芸評論家

○九月十八日(月)雨のち晴。新潮社小林博菅原国隆の案内にて新宿セントラルにストリップショオを観る。ヒロセ元美を楽屋に訪ふ、帰途酒場いすずにてのむ

○九月十九日(火)晴。越後国三条の筆師渡辺健一郎といふもの岸田國士\*紹介にて訪ね来る、すなはちリス一本イタチ一本、ヒツジ大小二本を購ふ、ヒツジの芯に黒き剛毛を入れたるは猪毛なるよし、筆の毛は貂を以てよしとす、但貂の尾のみを取るゆえ高価なりとぞ 渡辺氏は三条の名家にて先代より筆師也 鉄斎\*むかしその家に泊りて今に遺墨をとゞむと健一郎咄

\*岸田國士 劇作家、小説家、翻訳家、演出家

\*鉄斎 富岡鉄斎。幕末〜大正期の文人画家、儒学者

○九月二十一日(木)晴。上野美術館にして新制作派展覧会ヴェルニサージュ\*を見る、帰途はせ川におもむくに徳田雅彦中戸川宗一と逢ひさらにカーボン、エスポアルをめぐつてのむ 林美美子北原武夫と逢ふ \*ヴェルニサージュ 内覧会のこと

○九月二十二日(金)ときどき雨。新潮大田美和来話

○九月二十四日(日)晴。高橋邦太郎\*来話。じつに久しぶりの男也、閑談教刻、安部公房来話、その小説草藁持参す。安部はその住居立退を迫られて困却のよしを語る

\*高橋邦太郎 NHK職員、翻訳家。石川の小学校時代から東京外国語学校に至る同級生

○九月二十五日(月)晴。中央公論社長島中鵬二来話、夜はせ川にてのむ、河上徹太郎城左門\*に逢ふ、また芥川比呂志\*に逢ふ、芥川とともにどこやらのバーにてのみたるやうにおぼゆれどもその後は前後不覚なり

\*城左門 詩人・小説家。城昌幸の別名で、ミステリーでも活躍

\*芥川比呂志 俳優・演出家。芥川龍之介の長男

○九月二十六日(火)晴。菅原国隆新田敞来話、菅原にエセエ原藁十三枚までわたす、新潮に寄せむがために書きかけのものも、新田は鴎外集編纂依頼也

○九月二十八日(木)曇。夜来エセエ娯楽について三十枚脱藁新潮大田美和にこれをわたす。夜徳田雅彦鈴木貢とはせ川ひらのエスポールにてのむ

上段・夷齋筆談二 娯楽について 三十枚

○九月三十日(土) \*昨夜三好達治とともに新ばし若竹及銀座はせ川にてのみ深夜帰宅すれば海老名雄二来泊するあり、戸石泰一新田敞来話 \*この日は天気の記事なし

○十月二日(月)曇。新潮新田敞来話、森鴎外集上下二巻の編纂について指定をあたふ、夕四時より東京美術倶楽部にして今日出海の会におもむく盛会也。久保田万太郎と語る

○十月三日(火)晴。安部公房来話、新居に移転せるよしを告ぐ、但この新居他家の物置なりといふ、大門一男来話、原藁依頼也。大門カ

\* Henri Troyat アンリ・トロワイヤ。フランスの小説家、伝記作家、随筆家

\* 田辺茂一 紀伊国屋書店創業者

\* 八木義徳、野口富士男 いずれも小説家

○十月十日(火)雨。大門一男来。原藁催促也、安部公房来話、新居の造作をみづから按配する苦心を語る、安部の先日持参せる小説草藁を批評して返す

○十月十一日(水)あかつき雨やまず、夜来おとしばなし管仲二十枚藁成る、夜はせ川にて徳田雅彦と逢ひさらに門およびエスポールにてのむ 上段・おとしばなし管仲 二十枚

○十月十二日(木)曇。大門一男来、おとしばなし管仲の草藁をわたす、大門余のもとに来ること三年このたびはじめて寄藁の約を果す。小説公園\*に掲載すべきもの也。新潮より二万円借。大田美和これを持参す。大田をつれてはせ川におもむきたるに菅原国隆たまたま来り会す。さらにカーボンにてのむ

\* 小説公園 文芸誌。六興出版発行

○十月十三日(金)晴。夕読売ホールにて笈田幸吉門下生のピアノ演奏会あり、窪田啓作娘眞樹子七才メンデルスゾーンを弾きまた自ら作曲せる小曲を弾く、すなはちこの会におもむく、少女ちとの才あるに似たり。帰途はせ川にて眞樹子窪田夫妻及加藤周一夫妻と小宴。眞樹子に清月堂の菓子を贈る

○十月十六日(月)晴。菅原国隆来話、大門一男来話、おとしばなし原藁持参。よねとともに大映試写室にてダニイ・ケイ主演映画なんとかを観る、帰途花馬車にて小憩。よねをかへす、はせ川にて徳田雅彦鈴木貢と逢ひさらりロータリーにてのむ

○十月十七日(火)晴。銀座にてシャツを買ふ。夜徳田雅彦鈴木貢と若

ナディアンクラブ一壘持参す。たちどころにのむ。新潮社より森鴎外編纂費若干を届け来る、夜和田傳と閑談、酒のはなしを聞く、ミリンは三河の九重、カニの缶詰はF20をよしとすといふ

\*大門一男 東宝を経て六興商事出版部(のちの六興出版)を設立。翻訳も行う

○十月四日(水)雨。神田大屋書店にて朱楽菅江\*狂歌大体源真樹\*興歌考を購ふ。帰途はせ川にて小酌

\*朱楽菅江 江戸後期の戯作者・狂歌師、「狂歌大体」はその著書。「狂歌百鬼夜狂」(夷齋清言)参照

\*源真樹 本名林国雄、江戸中・後期の国学者。真顔に狂歌を学び、狂歌を「興歌」と呼ぶことを主張した

○十月六日(金)晴。夕六時よりピカデリー劇場にてヘツダガブラー\*の上演を観る、終演後レヴァンテにて千田是也田村秋子\*らと語る。帰途千田とともにエスポールにてのむ

\*ヘツダガブラー イプセンの戯曲「Hedda Gabler」のことか

\*田村秋子 女優

○十月八日(日)晴。窪田啓作来話。小林博来話、小林は小説新潮の原藁依頼也。窪田とともに新宿紀国屋におもむきフランス書を見

る Paul Claudel\* : L'oeil écoute, Sartre, Rousset\*, Rosenthal\* :

Entretiens sur la politique, Alain : Les idées et les âges, Henri

Troyat\* : L'araigne を購ふ、この店の喫茶部にて田辺茂一\*八木義徳\*

野口富士夫\*に逢ふ

\* Paul Claudel ポール・クロードル。フランスの詩人、劇作家。外交官として

駐日大使も務めた

\* Rousset ダビド・ルセ。フランスの作家、政治活動家

\* Rosenthal ジェラルド・ローゼンタール。フランスの法律家

竹カーボンにてのみさらにエスポール銀馬車におもむく。エスポールにて林房雄\*北原武夫井上友二郎\*に逢ふ。いささか酒につかれたり

\* 林房雄 小説家、文芸評論家

\* 井上友二郎 小説家

○十月二十二日(日)晴。水道橋能楽堂にて下掛宝生会演能を観る、小山書店の招待也、自然居士シテ宝生九郎ワキ松本謙三。狂言米市野村万蔵、紅葉狩シテ観世華雪ワキ宝生弥一、会場にて三好達治に逢ひともにも神田及新宿にてのむ

○十月二十三日(月)晴。菅原国隆来話、二十七日夜の日響演奏会の切符三枚を都合して届け来れる也、この演奏会には来朝中のレヴィ氏の出演あり、レヴィ氏のピアノ先日ラヂオにて聴きたるのみなれどもそのヴィルチュオジテ\*感ずべきもの也。右切符の一枚を徳田雅彦におくる。夕文藝春秋社楼上にてビールをのむ集會に列す

\*ヴィルチュオジテ virtuosite 妙技の意

○十月二十七日(金)晴。夕日比谷公会堂にてラザール・レヴィのピアノを聴く、シューマン協奏曲及ヴァリエーション、妙技也。ただ日響オーケストラの拙なるを憾む。帰途徳田雅彦とはせ川及エスポールにてのむ。公会堂にて窪田啓作に逢ひたれども出口にてその姿を見うしなひたり

○十月二十八日(土)晴。先日来書きつぎたる夷齋筆談三沈黙について三十二枚の藁成る、新潮十二月号のため也

上段・沈黙について 三十二枚 夷齋筆談三

○十月二十九日(日)晴。三越劇場にて木下順二\*作夕鶴の上演を観る。ぶどうの会と称するしろうと芝居にて立女形は山本安英\*也。帰途三好達治市原豊太\*とビールをのむ。夜に入つて雨。

\* 木下順一 劇作家、演劇評論家

\* 山本安英 女優、朗読家

\* 市原豊太 フランス文学者、随筆家

○十月二十九日\*(月)曇。東宝試写室にてフランス映画ヴェローヌの恋人を見る、つまらなし、藤川栄子桂ゆき子\*に逢ふ 夜菅原国隆徳田雅彦と銀座のあちこちにのむ 深夜豪雨

\* 二十九日 三十日の誤記と思われる

\* 桂ゆき子 桂ゆき。画家。初期はユキ子とも名乗っていた

○十月三十一日(火)雨。夕中央大学講堂にラザール・レヴィのピアノ演奏を聴く、曲はクープラン、フランク、ドビュッシイよりはじめてフランス現代音楽におよびシャブリエに終る。ヴィルチュオジテ賞するに堪へたり、帰途同道の徳田雅彦と銀座にてのむ

○十一月一日(水)晴。あたたかし、小説新潮小林博来話、原稟依頼也午後二時より文藝春秋新社引越祝の宴あり その宴に列す、帰途新宿紀之国屋に立寄りてフランス書を購入ふ Camus : Noces 及 Les Justes, Sartre : Les Jeux sont faits 及 La Putain Respectueuse, 田辺茂一とや

きとり屋にてのみまた紀ノ国屋喫茶室に於ける三田文学の会をのぞきて匆々に帰る

○十一月二日(木)晴。夜三越劇場にて文学座所演岸田國士作「道遠からん」を観る。芸の無き見世物也。坂口安吾夫妻と廊下にて逢ふ。坂口愛犬コロイ病死せりといふ。芝居はねてのち鍛冶町の喫茶店にて文人役者おほぜいにてビールをのむ

○十一月六日(月)曇。文芸列車といふ催しにて文藝春秋の依頼により四日正午東京駅発信州戸倉にむかひ小諸の藤村碑を見て五日夜帰る。至るところサイン責めにて俗悪呆れはてたり 日本人ことごとく狂せ

来訪のよし

上段：望楼 二十枚

○十一月十五日(水)晴。竹内読売記者、竹田博、安部公房来話 夜はせ川にて小酌この店のたべもの近來とくにまづくなりて舌これに堪えず、不心得也、

○十一月十六日(木)晴。小山清来話。一葉のたけくらべに倣つて大正版の吉原を書かんとするよしを語る。八木岡英治より来信、作品社の没落を告ぐ

○十一月十八日(土)雨。夕六時より神田共立講堂にてラザール・レヴィの告別演奏会あり、よねとともに雨をついてこれにおもむく、Couperin\* : Les Lys naissants, Les Rozeaux. Schumann\* : Kreisleriana. Liszt\* : Deux Legendes. Deux piano : Mozart\* et Chabrier\*。連弾は原智慧子、安川加寿子也 中についでシューマンもつともよし、帰途菅原国隆および池亀某女とともに銀座はせ川にて小酌

\* Couperin (フランソワ・クープラン)、Shumann (ロベルト・シューマン)、Liszt (フランツ・リスト)、Mozart (ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト)、Chabrier (エマニュエル・シャブリエ) いずれも作曲家

○十一月二十日(月)晴あたらしか也 島尾敏雄書おろし小説「贗学生」のために短評一枚を書きてこれを河出書房竹田博にあたふ、神保町きやんごるにおもむきてハイボールをのみ小憩 扇二本に句を書きてあたふ ときに夕刻神田の町はなはだ暗し 村口書房に立寄りて墨水遊覧誌\*一冊を購入ふ

\* 墨水遊覧誌 天保14年、公家徳大寺大納言実堅・日野前大納言資愛が幕府船で隅田川遊覧を行った際の記録。両卿および幕府側諸家の詩歌が入る。著者は花屋敷鞠場。「墨水遊覧」(江戸文学掌記)参照

るかのごとき感あり、今後かかる催しには一切参加すべからず。今朝新田徹来、森鷗外集上巻解説七枚及背徳者訳稟を訂正せるものを手交す 小諸の城址公園にて一句 信濃路の紅葉は早し藤村碑 その他いくつか書かされたれどみな忘れたり、帰来酒のせりもありていささか疲る、夜朱楽菅江狂歌大体を読了す

\* 背徳者 アンドレ・ジッド作品

○十一月八日(水)晴。よねと東宝映画試写室にフランス物の「Le Torrent」\*を観に行きたるに藤川母娘および河辺健一と逢ふ、転じて夕方より朝日講堂にフランス将来の映画ロダン及ゴッホを観る。帰途有楽町にて藤川河辺ともにビールをのみまた茶を喫して閑談す、帰来するに留守中の来客に八木岡英治、中央公論社某女創元社某女及銀座はせ川の女主人也、八木岡は作品社没落のよし、はせ川は昨日余がその不心得を叱せるが故に挨拶のための訪問也、ツクダ煮とカバヤを持参す 岸田國士よりその著「道遠からん」を贈らる、ここまで書いて甚だねむたし

\* Le Torrent フランス映画「Torrents」(邦題「憂愁夫人」、1950年12月日本公開)のことか

○十一月九日(木)晴。菅原国隆来話、島中鵬二来話。島中は原稟催促はなはだ急なれどもこのところ書くに懶く気がすまざるよしを答へおく、創元社袖某女来これは雑文の依頼なり即座にことわる、客のためにいそがしく終日出でず、夜カミュNoces 読了 小冊子ながら内容ゆたかにして感ずるところ少なからず、いづれ書くべし

○十一月十三日(月)晴。十九日土曜日の夜より島中鵬二の案内にて牛込双葉荘に泊り今夜かへる、「望楼」二十枚書く、中央公論特集に寄せむがため也、双葉荘にて井伏鱒二に逢ふ、留守中安部公房島尾敏雄

○十一月二十一日(火)晴。夜に入つて雨、八木岡英治来話 作品社の没落状況を聴く、将棋をさす

○十一月二十四日(金)雨のち晴。菅原国隆来、原稟催促也、安部公房来、その木彫三点を見せらる、展覧会に出品するよし也

○十一月二十七日(月)雨。菅原国隆来、書きかけの草藁の一部をわたす。斯波武来、山陽\*五言絶句の書幅を持参す これを購入ふ

\* 山陽 頼山陽。江戸後期の歴史家・思想家であり、漢詩や画もよくした文人  
○十一月二十九日(水)雨。夜来新潮連載のエセエの稟を書きつき既に成る。恋愛について三十五枚、新年号に寄稟せむとす、新潮大田美和来話、すなはち原稟をわたす、また新潮社出版部新田徹来森鷗外集下巻の目次をわたす、夜大雨の中に藤川栄子耀子の母子来話閑談数刻これが帰るを門に送れば月明か也

上段：恋愛について 三十五枚

○十一月三十日(木)晴。大田美和原稟料をとげ来る 夜窪田啓作来話、新潮社よりカミュのエトランジェ\*の翻訳を依頼されたるにつきその挨拶也 窪田かへらんとするにまた雨ふりはじむ ちかごろ天候さだまらず寒さやうやく迫る

\* エトランジェ「異邦人」

○十二月一日(金)雨。長野県小諸町荒町二葉楽器店より余の小照二葉送り来る さきごろ文芸列車にてその地にあそびたるをりひとの撮影したるもの也 夜ははせ川にて小酌

○十二月六日(水)晴。昨日井澤義雄神戸より来泊、昨夜井澤をともしんひてはせ川にてのむに徳田雅彦に会ひとともにジャポン、エスポアルにて小酌深夜かへる 徳田もまた来泊す はせ川にてうなぎの看板を書くうなぎもありてはせ川の酒 たれかにあとをつけてもらふつもり也

○十二月九日(土)晴。六日夜より小石川もみぢに泊り文藝春秋別冊のために小説演技二十二枚今晚稟成る。帰宅。井澤は留守中帰郷せりといふ。しかるに夜に入つて井澤再来、他所に泊りたるよしにてすなはちこれをともしなひてはせ川にて小酌、井澤かへる

上段・演技二十二枚

○十二月十日(日)晴。講談社よりミカンの箱を送り来る

○十二月十二日(火)晴。神田の古本屋にて Julien Benda : Le rapport de Dieu をあがなふ、帰途はせ川にて小酌

○十二月十四日(木)晴のち雨。昨夜おそく海老名雄二来泊、その関係せる泰むきの貿易会社とやら没落したりと語る 歳寒海老名も弱り目なるべし 今朝匆々に去る 夜韓非子を読む

○十二月十六日(土)晴。安部公房妻真知子来、安部病気のよし これに見舞をおくる。夜はせ川にてのみ鈴木貞とともにノンシヤラン及エスポアルにてまたのむ 深夜雨に打たれて帰宅 雷雨也

○十二月十七日(日)晴。新潮社より発行すべき森鷗外集下巻の解説八枚草し畢る

○十二月十八日(月)晴。文学座稽古場におもむきて三島由紀夫の邯鄲福田恆存の堅塁奪取の上演を観る 帰途はせ川にてのむ

○十二月十九日(火)晴。新潮社新田来、鷗外集解説をわたす。夜はせ川にて小酌。徳田雅彦菅原国隆と逢ふ

○十二月二十一日(木)雨のち晴。昨夜徳田雅彦田川博一らと銀座はせ川にて会しゴールデンゲートにおもむきまた鳥森若竹\*に至り連飲いささか酔ふ 徳田来泊今朝かへる、新潮社員某女来、翻訳背徳者の校正を一閲してかへす、昨日津島美知子夫人来ウイスキーと花を贈らる、歳暮の挨拶也

\*鳥森若竹 新ばし若竹などの表記もあり

○十二月二十二日(金)晴。新潮連載のエセエの稟を書きはじむ、夜菅原国隆来話

○十二月二十三日(土)晴。銀座はせ川女あるじ来、歳暮挨拶也、蒲鉾を贈らる。戸石泰一來話、檀一雄の近況を聞く、夜はせ川にて小酌、文藝春秋新社のパーティーに立寄りてすぐ帰宅 留守中新潮社より森鷗外集上巻五冊届ける

○十二月廿五日(月)晴。河出書房竹田博来、島尾敏雄著廣学生の成れるを持参す、夜はせ川にて小酌 また新ばし夏目にてのむ

○十二月二十六日(火)晴。新潮社員に背徳者の校正をわたす 夜徳田雅彦と銀座に数件をめぐつて忘年会を催す

○十二月二十七日(水)晴。菅原国隆来、夷齋筆談権力について九枚わたす、未完なれども期日迫つて詮方なし 来月々々これを書きつぐべし プサンより借金取来る、少額をあたへて去らしむ 残金なほ八千余円ありといふ 夜に入つて風すこしく寒し

上段・夷齋筆談 権力について 八枚 未完 附記一枚

○十二月二十九日(金)晴。新潮社より暮の金若干をとどける、夜徳田雅彦鈴木真菅原国隆と銀座数軒のみあるく、行くところ売文の徒に逢はざることなし エスポアルのるみ女よりネクタイを贈らる この日神田村口にて鞠場\*が都鳥考を購ふ

\*鞠場 花屋敷鞠場。骨董商・本草家・文人。姓は佐原、北野など。文化年間、隅田川畔の寺島村に植物園「百花園」を開く

○十二月卅日(土)小雨、山形なる沢渡恒より干柿を送り来る。返信に干柿や小雨の軒の薄あかり、安部公房その弟を伴ひて来話 世紀画集一帖を贈らる

○十二月三十一日(日)晴。新宿紀ノ国屋にて Albert Camus : Le Mythe de Sisyphe, Correspondances (Gide\* et Claudel) を購ふ。銀座よし

田にて小酌そばを食ふ。ときすでに夕刻さらにはせ川におもむきまた支那料理某亭に行き最後、アカンサスをもつて本年の飲み納めとす、この夜の仲間は今日出海永井龍男城左門巖谷大四ブーチャン及徳田雅彦也 雑然また陶然としてここに一年すぎたり

\*Gide アンドレ・ジッド(ジイド)。フランスの小説家

昭和二十六年 一九五一年

○一月一日(月)晴天寒はなはだしからず、家居して床に鉄斎を掛けひとり酒を酌む、さひはひに訪客のわづらはしきもの無し、夷齋筆談権力について続篇の稟を起す 戯詠 初からずい津久の空に翔けるらむ 酒爰元至高輪の春

○一月二日(火)晴。終日無事

○一月三日(水)晴。ローレンス「息子と恋人」(吉田健一訳)読了最後に母を突き放して外国に飛び立つやうに書きたらばよかりしならむ 原作のままにては恋愛観念は閉鎖されたるごとくにておもしろからず 夜みき年賀に来る、海苔を贈らる

○一月四日(木)晴。三越劇場にて俳優座公演桜の園を観る。帰途三好達治と鳥森若竹におもむきまたカーボンに転じてのむ 深夜帰宅 海老名雄二来泊こいつ留守中に本をかきまはして不届な奴也

○一月五日(金)晴。海老名かへる、伊藤濱子来話、カンヅメを贈らる。昨夜の酒にてあたまおもし

○一月六日(土)晴。料亭濱田女あるじ来話、時津風後援会に入会をた

のまる。八木岡英治松村良吉来話 ついで池田よし来ベーコンチーズを贈らる、よしにアカンサス宛紹介状を書く

○一月七日(日)曇。終日家居。夜佐々木基一來話。酒をくみて歓談時の移るを忘る、佐々木は富士見ヶ丘に家を新築すべしといふ

○一月八日(月)晴。小山清来話。元旦にころみたる戯墨を小山清に托して津島美知子に贈る、菅原国隆来話、池田よし来話、終日客と対談に疲れたり

○一月十日(水)雪、雨まじりに少しつもる。濱田某女来話 筒井よし子のうはさを聞く、濱田より酒とり貝セルリをおくらる。窪田啓作来話。窪田は現住所の立退要求にて当惑すと語る

○一月十一日(木)うすぐもり、山川朝子来話河出書房文藝編輯部につとめることになりしと語る 胃を病むよし 河辺健一來話 夕方文藝春秋社におもむく 窪田啓作に文学界に執筆することをすすむるはがきを出す 夜はせ川におもむく 先日この店の看板のためにうなきもありてはせ川の酒と書いておきたるに傘雨\*宗匠の附句あり 冬の夜の風情うれしき柳かな いつまでも風邪の抜けない咳をして、これに応へてざれ歌二首しるす 柳かけ踏みたかへたるほろ酔の足おほつかな千鳥にも似す また かせの名は野風谷風すまふ取せきとめあへぬ恋の山風 若竹およびカーボンにも立寄りてかへる

\*傘雨 久保田万太郎の雅号

○一月十二日(金)晴。終日門を出でず 夜窪田啓作来話

○一月十三日(土)晴。島尾敏雄福島より神戸にかへる途中とてたづね来る 胃アトニー療養のため蔵王の湯におもむけりと語る 酒も肉も口にしがたしと聞きわづかに紅茶にてしばらく閑談

○一月十四日(日)晴。風寒し。籠居筆すゝまざれども随筆の草稿たど

たどしく書く。感あり、頑固とは何を理解しないかといふことではな  
く何を撰択するかといふことである

○一月十七日(水)晴。昨日宮川曼魚より来信、新潮二月号 余が随筆  
の末尾に病弱吐血の語を措きたるにその筆の綾なるを知らず曼魚子見  
舞状を寄せ来れるなり 返信に一句添へてやる 風邪ひきの恋とは見  
えぬしやがれ声 夜海老名雄二来話、筒井夫婦わかれについての採め  
ごとを聴く よねこの二日ともひとりにて活動写真を観に行く

○一月十八日(木)晴。菅原国隆来話。原稟催促也。終日無事。深夜に  
およんで随筆の稟を草し終る。これ新潮三月号に寄せむがため也、権  
力について(承前)三十八枚夷齋筆談六

上段：権力について 承前 三十八枚 夷齋筆談六

○一月十九日(金)晴。新潮社大田美和来、夷齋筆談六の原稟をわたす。  
夜はせ川にてのむ。先日の傘雨の句に附けて 身はやつせとも松風を  
聴く。しかれども前句に風邪とあれば松風は不束なり改むべし

○一月二十日(土)晴。あたゝかし。大田美和来。元東京新聞記者平岩  
来、これはさきにレツドパーチにて解雇されたるものなれどもその処  
分不当の故をもつて復職運動のため署名帖に記入を求めらる。運動妥  
当なりとみとめてこれに署名す。展望編集部員石井来。談話記事を取  
るための訪問なり。すこし話す。

○一月二十一日(日) \*昨夜はせ川におもむき前夜の附句をあらたむ、  
身は躰せども京訛なるとす。それよりアカンサスにてのみ また鳥森  
若竹におもむきたるに三好達治座にあり吉川幸次郎\*貝塚茂樹\*桑原武  
夫\*を紹介さる。さらにカーボンに転ず 深夜かへり今朝昏々として  
起き出づることをえず 夜に至つていさゝか回復す 深夜フォーク  
ナー「サンクチュアリ」の邦訳を読了す

二十一枚。午後文藝春秋社におもむき坂口安吾菅原国隆のたまたま来  
れるに逢ひすなはちともにはせ川にてのむ。坂口伊東にかへる。徳田  
鈴木とともにアカンサスにてのみ帰途若竹に立寄りて帰宅  
上段：さらば垣 二十一枚

○二月一日(木)晴。夜はせ川にて城左門に逢ふ。はせ川紹介にて昭和  
通の髪床におもむきたるにこの界限にも似ず当節は田舎にもあらざる  
べきほどの貧弱なる床屋也、いかにもはせ川の紹介しさうなところ也。  
アカンサスにおもむき幸子と吉野すしを食ひに行く。エスポアルに立  
寄りてかへる

○二月五日(月)晴。東宝試写室にてフランス映画パルムの僧院を観る。  
帰途はせ川にて藤川栄子母子及びよねにうなぎを餐す。中島健蔵浦松  
佐美太郎\*に逢ふ。酔余真杉静枝\*をのしつてこれを怒らしむ。なげ  
くべし。アカンサスに立寄りてかへる。

\*浦松佐美太郎 ジャーナリスト・評論家・登山家  
\*真杉静枝 小説家

○二月六日(火)晴。新潮社に酒井を訪ねて背徳者印税の一部を借りる。  
神田井上書店にて文心彫龍を購ふ。帰途はせ川およびアカンサスにて  
小酌。けふは早めに帰宅。真杉静枝に託びの手紙を出す。神田月曜書  
房に安部公房の本の出版につきて推薦の挨拶をいふ。

\*文心彫龍 『文心彫龍』か。中国六朝時代に梁の劉勰が著した文学理論書

○二月七日(水)晴。新潮社より森鷗外集下巻五冊届け来る。終日家居。  
○二月九日(金)曇小雨。昨夜小林秀雄と鳥森若竹にて逢ひともにアカ  
ンサスにてのみ大酔して帰途徳田雅彦をつれて高輪濱田におもむき酒  
宴払暁におよぶ。混沌として人事を弁せず、ただいたづらに肉体のお  
とろへたることを感ず

\*この日は天気の記事なし

\*吉川幸次郎(中国文学者)、貝塚茂樹(中国史学者)、桑原武夫(フランス文学者、  
評論家)いずれも京都大学で教鞭をとった京都学派

○一月二十二日(月)晴。日本生命館にて文学界主催スエーデン映画の  
試写を観る。つまらなし。けふよねの誕生日なり、すなはち帰途はせ  
川にとまひてうなぎを餐す。よねをさきに帰したるのち鈴木貢とア  
カンサスにおもむく。鈴木腹痛にて酒なかばにしてかへる。ひとりエ  
スポールにおもむく、乱酔

○一月二十三日(火)晴。またしても宿酔昏昏たり。伊藤はま来話。濱  
田初枝来話。安部公房にはがきを出す

○一月二十四日(水)晴。銀座東宝試写室にてコクトーの映画オルフェ  
を観る。おもしろし。よね藤川母娘とともにせ川にてうなぎを食ふ。  
余は別に徳田鈴木田川とともにせ川よりアカンサスに転じてのむ、  
乱酔前後不覚也

○一月二十五日(木)晴。池田生子来話。アカンサスの店に出ることに  
話きまる。

○一月二十七日(土)晴。濱田に鈴木徳田中戸川を招いて酒盛を催す、  
さらにアカンサスにおもむき大いに酔ふ。よしをつれて新ばしの若竹  
およびカーボンにてまたのむ。この日安部公房妻を伊藤濱子に紹介し  
て職に就かしむ。新潮社よりジイド背徳者三冊を届け来る。夜留守中  
に菅原国隆金を届けに来れども逢はず

○一月二十八日(日)晴。よし来話、アカンサスにつとまらざることを  
いふ。よねとよしとをつれて濱田にて小酌

○一月三十一日(水)晴。さる二十九日午後より鈴木貢案内にて渋谷  
東京におもむき文学界三月号のために短篇一つ今朝成る。さらば垣

○二月十日(土)晴、春暖に似たり。よし来話。よしの誕生日とてこれ  
を濱田に招じて楼上にて小酌。

○二月十二日(月)晴。安部公房来話。安部をとまひて鳥森若竹にて  
のむ、たまたま城左門に逢ひすなはちともにはパー数軒をめぐる最後に  
城を高輪濱田につれ来て泊らしむ。

○二月十三日(火)晴。講談社高橋清次来。原稟依頼也 ウィスキー一  
本を贈らる。高橋をとまひて濱田におもむきたるに城左門いまだ楼  
上にあり鼎座してビールをのむ 城かへる。夜濱田初枝来話。鯉をお  
くらる。鯉こくにして食ふにその味美也。海老名雄二来。すぐに追ひ  
かへす。こやつ近頃酔態はなはだ下品也

○二月十四日(水)朝よりふり出したる雪 夜に入つてさらにはげしく  
風これに加はつて吹雪となる。昼菅原国隆来話

○二月十五日(木)晴。夜来の積雪三尺におよび十五年ぶりとやらにて  
市中の交通ほとんど杜絶したるがごとし。終日出でず炬燵して山中  
人饒舌\*を読む、これ明治十二年板の袖珍本也 画中詩人咏物画家写  
生同一機軸の句あり、果して然るや否や、また然りとすると咏物写  
生のこと今日に於て何の芸術的意味ありや考ふべし。夜徳田雅彦来話  
ともに濱田におもむきて小酌、徳田同所に泊る

\*山人饒舌 田能村竹田の画論書。翌月脱稿の「風景について」(『夷齋筆談』  
冒頭にも引用あり)

○二月十九日(月)晴。さる十六日夜より濱田楼上に泊り別冊文藝春秋  
二十号のために小説の稟を起し今日成る。常陸帯二十五枚

上段：常陸帯 二十五枚

○二月二十一日(水)晴。夜来ジイドむかしばなし十六枚の稟を起しあ  
かつきに成る。昨夜夕刊にアンドレ・ジイドの訃をつたへたるに依り

文学界の需めに応じて草せるもの也 実情をいへばアカンサスの勘定書すこし大中にて文藝春秋社宛に届け来りたるがため也。夜徳田雅彦鈴木貢とともにアカンサスにてのみそれより烏森の小料理屋におもむく、これ男色の店也、屋根低き二階よりおり来るものあつて余に声をかく、すなはち三島由紀夫也、はたせるかなの感あり、さらに徳田案内にて西銀座バーボンにおもむく。オールストリップの景物あり。帰途濱田に立寄りて小酌。たちまち眠気をもよふしてその場に臥す。

上段…ジイドむかしばなし 十六枚

○二月二十二日(木)晴。昼のうち風強くしてあたゝかし 濱田に半日をすぎす 菅原国隆来話、菅原妹と濱田娘と白百合にて同窓のよし

○二月二十三日(金)晴。濱田初枝来話。このひと山田有勝\*を識れることを聞く。夜はせ川にて小酌

\*山田有勝 詩人

○二月二十六日(月)晴。夜湘南電車不通にて窪田啓作北川正来泊。余かへつて濱田におもむきて泊る

○三月一日(木)晴。去る二十六日夜より濱田に滞在 今朝隨筆の稟を草し了る 夷齋筆談七風景について十八枚也 大田美和の来れるに手交す この間新潮社よりジイド全集背徳者印税をとげ来る。また新宿紀ノ国屋におもむきつ Andre Gide : Literature engagée 一冊をあがなふ 上段…風景について 十八枚 夷齋筆談七

○三月三日(土)晴。神田山本にて秘伝花鏡\*六冊を購ふ。よね余のため背広一着を購ひ来る。濱田より桜もちをおくられたれば若竹のちらし鮎をおくる

\*秘伝花鏡 陳漫により清代初期に著された園芸書。日本では『秘伝花鏡』と称することが多い

\*仲田菊代 画家、仲田好江の名でも活動、女流画家協会創立メンバー

\*藤島武一 画家

○三月十六日(金)晴。昨夜徳田雅彦濱田に来泊 今日よし来、よねとよしとを携へて烏森若竹にて小酌。鈴木貢来り会す、転じて鈴木とアカンサスにおもむく。今朝小牧近江\*より来信、「ジイドむかしばなし」を読み疇昔の交をおもひおこしたるもの也 この尺牘小牧の人の柄を匂はせて甚だ佳 故人の情掬するに堪へたり

\*小牧近江 フランス文学者・社会運動家

○三月十七日(土)晴。小牧近江に書を遣る。新宿紀ノ国やにおもむきたるにフランスの本いまだ届かず、池島信平真杉静枝草野心平\*に逢ふ 池島とお龍にてのむ 夜よし来話

\*草野心平 詩人

○三月十八日(日)晴。昨夜より今夜におよび荀子\*と淮南子\*とを読む。荀子はむかし読みたるほどにおもしろくおもしろ。淮南子は神仙に関する数篇を佚したることを憾みとすべし

\*荀子 中国戦国時代末の思想家で儒学者の荀子の思想を後代がまとめた書

\*淮南子 中国前漢時代に編纂された思想書

○三月二十二日(木)曇。うす日さす、島尾敏雄安部公房来話、文藝春秋新社におもむき島尾を鈴木貢に紹介す、同社にて種痘す、濱田長女久子上野音楽学校声楽科の入学試験に合格したるをもつてこれに祝の品をおくる

○三月二十四日(土)晴。昨夜文藝春秋招待にて帝劇に「モルガンお雪」といふ見世物を観る。その帰途徳田雅彦とともにお毘代ジャポネスポールを歴訪し最後に井上友一郎と車にて渋谷東京におもむく、井上はかへり徳田とふたりにて泊る、今朝帰宅、昨夜ルミにキスを強要され

○三月六日(火)曇。夜に入つて雨。昨夜海老名雄二または乱酔して来る。匆匆に追ひかえす。こいつ東海汽船会社より解雇されたるのちはこの一年ばかりは生活すつかりぐうたらになれるが如し。余をさそつて濱田におもむきてのまんと言ふ。唾棄すべし、すなはち書を遣して今後深夜の来訪を拒絶するむねを伝へおく。これにてきかざれば絶交のほかなし

○三月七日(水)晴。今日は余の誕生日也。濱田初枝来、祝ひのためとて鯛塩焼一尾、豚蒸焼一皿、海老てんぷら一皿、蒲鉾野菜盛合せ一皿を贈らる。山川朝子来話。山川をともしなひて銀座文藝春秋社におもむく。昨夜三階編輯室にて小火を出したるにつきその跡を見物す。山川と花馬車にてアイスクリームをのむ。山川よりその著小公子を贈らる。さらにはせ川におもむくに池島信平徳田雅彦巖谷大四来り会し 転じて一同新宿に車を走らせてお龍にて痛飲す、またさらに神楽坂松ヶ枝におもむく、池島亭主也。徳田巖谷山川をつれて濱田にかへり来つてまたも小酌 払曉四時に至る。余ひとり家にかへり三人濱田に泊る。

○三月八日(木)晴。あたゝかにて春来れるがごとし、濱田にて巖谷山川とスキ焼にて小酌、徳田は社用とて早くかへりたり。二人とともに麹町角川書店におもむき堀辰雄の著書を岸田國士に送るべきことをいふ。角川余を招じて神田のてんぷら屋天政にてのむ。この店の海老よろし。帰途銀座空也にて菓子折をとりのへてこれを濱田に贈る。

○三月十日(土)雨。よし来。すなはちよねとよしとを携へて新ばし若竹にて小酌。またアマンドにて小憩。銀座松坂やにてよねに雨傘を買ひあたふ。

○三月十二日(月)晴。銀座資生堂にて仲田菊代\*の個展を観る。また松坂やにて藤島武二\*展覧会を観る。帰途烏森若竹にて小酌

くちびるを噛まれたる痕痛し 銀座はせ川母娘来、この店に行かざること久しければ挨拶に来れる也 これを濱田につれ行きて茶菓を供す

○三月廿九日(木)晴。さきごろより書きつきたる夷齋筆談八の稟成る。技術について二十五枚。新潮大田美和の来れるにわたす。河上徹太郎書を寄せてクロードルジイド往復書簡集の借覧をもとむ。すなはちその書を大田美和に托して河上宅に届けしむることゝす 夜ひとり若竹にてのむ

上段…技術について 二十五枚 夷齋筆談八

○三月三十日(金)晴。上野博物館にてマチス展覧会を観る、そのヴァンス礼拝堂のための仕事はなはだ仏画に似たるをよろこぶ 帰途銀座吉田にて河上徹太郎今日出海に逢ひ小酌、その店にたまたま来れる商人よりゆかた一反を買ふ、ロータリイに立寄りて帰宅

○三月三十一日(土)晴。月曜書房野原来話、安部公房に戦後文学賞をおくることに決定せりと報告す、ならびにその著壁に序文を書くことを依頼さる、賞のこと安部のためによるこぶべし 林達夫より岩波文庫板ヴォルテール哲学書簡を贈らる、林を平凡社に訪ふ、近くのピヤホールにてビールをのみ閑談、帰途烏森若竹にて小酌、小林秀雄に逢ふ

○四月二日(月)雨。嘉昭片瀬よりラヂオを届け来る、しろうとの作りたるラジオのよしにて米の望みに依りこれをあがなふ、嘉昭と将棋をさす

○四月四日(水)小雨のち曇。新潮主催にてセントラル試写室になんとかいふアメリカ映画を観る。愚劣なり、帰途藤川栄子母子とアマンドにて小憩。それより若竹におもむき河上徹太郎三好達治と逢ふ、アカンサスの幸子病すこしく癒えたりと聞きすなはちその店に行く。またエスポアルにも立寄り、例に依つて乱酔

○四月七日(土) 雨のち晴。東中野モナミに於て第二回戦後文学賞授賞式あり 受賞者安部公房也 すなはちその会に列す 佐々木基一 般若雄高\*野間宏\*花田清輝\*椎名麟三\*同席、閑談数刻 帰途アカンサスにて小酌

\* 般若雄高 埴谷雄高のこと(本名:般若豊)。小説家・評論家

\* 野間宏 小説家・評論家

\* 花田清輝 評論家・小説家

\* 椎名麟三 小説家

○四月八日(日) 晴。井澤義雄神戸より来泊、うなぎ一折贈らる。井澤とともに新宿紀ノ国屋におもむく Histoire de mes pensées (Alain)、Chine (Marc Chadourne\*)をあがなふ。お龍の店にて小酌

\* Marc Chadourne マルク・シャドゥルヌ。フランスの作家

○四月九日(月) 晴。群像有木勉と川島と来る。有木は高橋清次のキング編輯長に転じたるのちを受けて群像編輯長となりたるもの也 二人をつれてアカンサス及若竹にて小酌。また蛇の新区にて月曜書房の永田、読売の竹内に会ふ。さらに有木の案内にてルビコンにおもむく 最後アカンサスのさち子を車にて霞町のその家に送る

○四月十日(火) 晴。井澤義雄と新宿紀ノ国屋におもむきて本を購ふ Valéry: Mon Faust, Alain: Mars, Henri Mondore\*: Mallarmé et Valéry, Kafka: Journal intime、河盛好蔵に逢ひお龍にてビールをのむ、鈴木真来り会す、河盛と別れ井澤の東京駅より神戸にかへるを送りて鈴木とともにアカンサスにおもむく、徳田雅彦来る、帰途さち子其他をつれて聘珍にてそばを食ふ

\* Henri Mondore 正しくはHenri Mondor (アンリ・モンドール)。フランスの外科医師でフランス文学史、医学史の著作でも知られる

○四月二十五日(水) 晴。夜窪田啓作菅原国隆来話、晚餐をともにして閑談す 窪田はエトランジェの翻訳成りこれを新潮に発表するよし

○四月二十六日(木) 晴。菅原国隆来、新潮よりの借五、○○○菅原とともに烏森若竹にてのむ、帰途新橋マーケット某店にて入江某女の勤めをるに逢ふ

○四月二十九日(日) 今晩夷齋筆談九、悪運について二十枚成る、ときに戸外に雨声を聴く、のち晴。大田美和来、筆談の草藁をわたす、上野博物館におもむき宗達光琳\*展を観る、蓮玉庵にてそばを食ひ浅草におもむき駒形どせうにてビールをのむ

上段: 悪運について 二十枚 夷齋筆談九

\* 宗達光琳 俵屋宗達と尾形光琳。ともに江戸期の絵師

○四月三十日(月) 晴。大映試写室にて映画自由学校を観る 小野詮蔵\*初役にて出演 とんと感服せず 帰途田川と銀座にてビールをのむ。また若竹におもむく、河上徹太郎に逢ふ

\* 小野詮蔵 文藝春秋社の編集者、「小野文春」の芸名で俳優として出演

○五月一日(火) 晴。新宿紀ノ国屋に Letters de Marcel Proust à Bibesco を購ふ。帰途若竹にて小酌

○五月二日(水) 晴。岩波書店某女史来、つまらぬ原藁依頼にてこれのことわる。改造社天野来、近代短篇小説集とやらに余の旧作曾呂利咄を収録したといふ、これを許す、濱田夫人はじめて吉井徳子を伴ひて来話、ラヂオ役者恩田清二郎来話

○五月三日(木) 晴。安部公房著壁のために序を撰す、六枚、月曜書房

○四月十一日(水) 雨。丸ビルにて福中骨董屋のペルシヤ美術品の展覧会を観る。帰途若竹にて小酌。巷にマツカツサー\*解任の報を聞く

\* マツカツサー 解任の報を聞く

○四月十六日(月) 晴。山川朝子来、原藁催促也、よねと銀座東宝試写室にて映画レベツカを観る、帰途若竹にて小酌

○四月十七日(火) 小雨、ときどき晴、神田月曜書房におもむきて安部公房の本の刊行につきて話す、その近くの店にて永田野原と小酌、中野重治より来信、竹田\*と中斎\*との交友につきて問を呈し来る

\* 竹田 田能村竹田。江戸期の文人画家

\* 中斎 江戸期の儒学者・大塩平八郎の号

○四月十九日(木) 晴。さきごろよりの小説草藁夜来これを書きつぎて今朝成る。末の松山四十枚、群像六月号に寄せんがため也 川島来、すなはち原藁をわたす 河辺健一來、「人間」没落に頻すといふ、山川朝子来、朝子とともに神田のてんぷら屋にてのみ新宿お龍に転じつひに三軒茶屋なるその家に送る

上段: 末の松山 四十枚

○四月二十日(金) 晴。夜若竹の直の会の発会式におもむく 三好達治河上徹太郎吉田健一に逢ふ

○四月二十一日(土) 小雨のち晴。高松宮邸にしてアルピヨンの会に出席す 帰途若竹におもむく、幸子を電話にて呼ぶ すなはちアカンサスに転ず、幸子を車にてその家におくる、昼講談社有木勉来話

○四月二十二日(日) 晴。よねひとり上野博物館にマチス展および琳派展を見に行く、安部公房夫妻来話、山川朝子のために文藝に寄せむとして小説草藁小公子十三枚けふ一日にて書く

上段: 小公子 十三枚

○四月二十三日(月) 晴。菅原国隆来、小林秀雄の寄贈に係るその著真

より刊行予定のものなり

上段: 壁序 六枚

○五月六日(日) 晴。漫に明治神宮境内をあるく。帰途新宿お龍にて小酌 池島信平と逢ふ

○五月八日(火) 雨。昨夜田村泰次郎\*と銀座にてのみ元芸者喜春がひさぐ浴衣を買ひてかへる。今日終日不出、濱田夫人来話、商売不況のよしを語る。孔叢子\*読了。この書の記載信じがたきふしあれどもなほ一読に堪へたり ちなみに大田南畝\*旧蔵本にて南畝自筆の書入またその学に勉めるたることをしのばしむ

\* 田村泰次郎 小説家

\* 孔叢子 中国春秋時代の儒家・孔子およびその代々の子孫の言行を収めた書物

\* 大田南畝 江戸中後期の文人で狂歌師、御家人。別号に蜀山人など

○五月十四日(月) 晴。新潮社におもむくに応待無礼也 新潮に寄藁せざることを、中央公論社に島中鵬二と逢ふ、鵬二と有楽町すしやにて中食、夜徳田雅彦鈴木真とともにせ川エスポアルアカンサスにてのむ

○五月二十二日(火) 晴。神田村口書房におもむきて蜀山飯盛\*一九\*狂歌合幅及清水濱臣\*宛校斎書簡一幅をあがなふ、帰途キヤンドルに小憩、この朝ファルス二十枚脱藁中央公論特集に寄せむとす、村口書房二階にて大雅堂\*筆瀟湘八景屏風六曲一 双煎茶仕立を観る

上段: ファルス 二十枚

\* 飯盛 江戸期の狂歌師・宿屋飯盛のことか

\* 一九 江戸期の戯作者、絵師の十返舎一九のことか

\* 清水濱臣 江戸後期の歌人、国学者

\* 大雅堂 江戸後期の文人画家・池大雅のこと



- 五月二十三日(水)晴。中央公論社員某の来れるにファルスの原稟をわたす、夜窪田啓作来話、ハムを贈らる
- 五月二十四日(木)晴。銀座東宝試写室にてオルフェを観る、帰途窪田啓作夫妻菅原国隆と花馬車にて小憩 夜はせ川にて徳田雅彦河上徹太郎と逢ひともにエスポールにおもむきまた新宿ナルシスにてのむ徳田濱田に泊る
- 五月二十五日(金)晴、オール読物にて宮川曼魚娘の写真を載せるにつき狂歌を寄す 花火待つゆかたの袖にそよ／＼とうなぎの香よりほふ染色 この夜池島信平空路ヨーロッパにおもむく
- 五月二十九日(火)晴。新宿紀ノ国屋に「James\* et Gide : Correspondance, Canus : Actuelles, Sartre : Beaudelaire, を購ふ。帰途新ばし若竹にて小酌、月曜書房より安部公房著「壁」七部届け来る、余の序を添へたり
- \* James フランシス・ジャム。フランスの詩人、小説家、劇作家
- 五月三十一日(木)曇小雨、夷齋筆談十仕事について十枚菅原国隆の来れるにわたす
- 上段：仕事について上 十枚 夷齋筆談十
- 六月十九日(火)晴。日記をおこたること二旬におよぶ。今朝合縁奇縁第一章十四枚成る、別冊文藝春秋に寄するため也、午後新宿紀ノ国屋におもむきてフランス書を五冊をあがなふ Aragon\* : Les Communistes, Alain : Vingt Leçons sur les Beaux-arts, Sartre : L'imaginaire, Canus : Le Malentendu suivi de Caligula : L'État de siège. 帰途中村屋三階にて桜桃忌に列す、夜銀座に転じ徳田雅彦とアカンサスにて小酌
- 上段：合縁奇縁 第一章 十四枚

- 八月十日(金)晴。新潮と絶縁することに決してそのむねを菅原国隆にいふ
- 八月十一日(土)晴。文藝春秋社楼上にて池島信平の欧羅巴の旅より還れるを歓迎する会に列す 連日旱天のところこの日夜におよんで雷雨あり
- 八月十三日(月)晴。窪田啓作来話、フランス訳カフカ短篇集「Muraille de Chine」を贈らる
- 八月十五日(水)うすぐもり、おとしばなし清盛二十五枚を草しこれをオール読物に寄す
- 上段：おとしばなし清盛 二十五枚
- 八月二十七日(月)晴。論争ばやり二十二枚を草す文学界十月号に寄せむとす 褥暑旬余にわたつてつゞく
- 上段：論争ばやり 二十二枚
- 八月三十一日(金)晴。文藝春秋に寄せむがために善人悪人六枚を草す、文藝春秋社にて坂口安吾に逢ふ、坂口疲労困憊のていにて見るに堪へず わづかに数語を交して別れたり
- 上段：善人悪人 六枚
- 九月一日(土)晴、小雨。しばらく日記を怠りたればけふよりまたこれを続けむとおもふ、午後上野美術館におもむきて二科展を観る、藤川栄子岡本太郎等と語る 安部公房妻病はなはだ篤きよしを聞く、帰途銀座よし田及はせ川にて小酌
- 九月二日(日)晴。高島屋にてふたたびピカソ展を観る。甚だ善し、帰途有楽町の名も知れぬ酒場にて小憩、日曜日は知合の酒店みな休業

- \* Aragon ルイ・アラゴン。フランスの詩人、小説家、文芸評論家
- 六月二十三日(土)昼晴。夜曇。深夜雷雨。昼小山清来話。夜よし及び伊藤濱子来話。夷齋筆談十一仕事について続稟十五枚書く
- 上段：仕事について続 十五枚 夷齋筆談十一
- 六月二十八日(木)曇小雨。乱世雑談十六枚書く、文学界八月号に寄せんとす、林芙美子の急逝を聞く。夜烏森若竹にて小酌
- 上段：乱世雑談 十六枚

- 七月十九日(木)晴。夜来芝居きらひ二十二枚脱稟文学界九月号に寄す 銀座リドにて花房満三郎\*鈴木貞と小憩 夜若竹にて小酌
- 上段：芝居きらひ 二十二枚
- \* 花房満三郎 文藝春秋社の編集者
- 八月一日(水)晴。合縁奇縁第二回三十五枚脱稟。三越にて新樹会展覧会を観る、会場にて小泉清\*と逢ふ、新宿紀ノ国屋にて「Jacques Martain\* : Raison et Raisons, Aragon : Chroniques du bel canto, Sartre : L'Engrenage, Valéry : Histoires brisées」を購ふ 夜徳田雅彦とはせ川ハゲ天アカンサスにてのむ。昨日安部公房芥川賞を受く
- 上段：合縁奇縁 第二回 三十五枚
- \* 小泉清 画家、小泉八雲の三男
- \* Jacques Martain ジャック・マリタン。フランスの哲学者
- 八月六日(月)晴。文藝春秋社にて久保田万太郎と逢ひつひに深更に至るまでともにのむ ブルドツグよし田ナポレオンとのみ廻りて最後はひとりアカンサスに眠る、同郷の先輩久保田の万さんとのむこと今宵はじめて也
- 八月七日(火)晴。昼安部公房来、文藝編輯部巖谷大四山川朝子写真師同伴にて来り 安部と余との対座せるところを写真にうつす 文藝

- にて不便也、斯波来話、外套の修繕を依頼す、小説の稟を起さんとして筆すすまず 書を読まむとして想またみだる 秋夜蕭條たり
- 九月三日(月)晴。夕銀座吉田にて吉田健一と会す 夜徳田雅彦寺田武雄とはせ川にて逢ひともに東京温泉におもむきてトルコ風呂に浴す、ミス・トルコと称するものを見物したることこれが初めて也、帰途サロメ及エスポールにて小酌
- 九月四日(火)晴。角川源義来話、文庫本澤東綺譚\*解説を依頼さる、角川とよしだにて小酌、夜はせ川にて北原武夫に逢ふ
- \* 澤東綺譚 永井荷風の小説
- □
- 九月六日(木)晴。夜来角川源義の乞を容れて澤東綺譚解説の稟を草す、十枚、文藝春秋社に角川を呼びてこれをわたす、加藤周一フランスにおもむくにつき文学界に通信を寄せしめんがために池島信平に配慮を求む よし田にて城左門に逢ひ馬上盃におもむく、夜はせ川にて加藤池島と会す、また徳田雅彦とエスポールにて小酌
- 上段：澤東綺譚 解説 十枚
- 九月七日(金)晴。セントラル試写室にてベット・デヴィス出演「About Eve\*」を観る、夜徳田雅彦鈴木貞とともにせ川にて会ひともにアカンサス、エスポールにおもむきさらに新宿お龍に転じて痛飲乱酔す
- \* All about Eve 「エヴの総」 1950年、ベティ・デイヴィス主演
- 九月八日(土)晴。新宿紀伊国やにてフラン書をあがなふ、Jean Genet\* : Journal du voleur\*, Jean Giraudoux\* : La Française et la France, Sartre : Le Mur, Aragon L'Homme communiste ; et Anicet, Paul Claudel : Figures et paraboles 紀ノ国や喫茶室にて清水幾太郎\*、河盛好蔵に逢ふ、帰途銀座よし田にて小酌

\* Jean Genet ジャン・ジュネ。フランスの小説家、詩人、エッセイスト、劇作家で政治活動家

\* Jean Giraudoux ジャン・ジロドゥ。フランスの劇作家、小説家、外交官でもあった  
\* 清水幾多郎 社会学者・評論家

○九月十一日(火)晴。昨夜はせ川にて池島信平加藤周一と会し加藤が文学界にフランス便りを送る件ままとりたることを聞く。池島ほか今日出海大岡昇平徳田雅彦とともにあちこちの酒場をめぐり、さらに新宿に転じ目白なる池島邸におもむきて一泊。今朝文藝春秋社に行きて徳田鈴木とともにブルドッグにて昼餐、日本橋におもむきて窪田啓作に逢ふ、鮎佐のつくだにを購ひて帰る

○九月十二日(水)晴。よし来話、昨日のつくだ煮の裾分をおくる。よし田にて河上徹太郎井上友一郎と逢ふ、また新潮社新田敏を招いて「焼跡のイエス」三千部増刷のため昨日花舎の検印をわたす

○九月十四日(金)晴。新潮新田敏来、夷齋筆談上梓について交渉を受く。安部公房来、ともに牛込なる勅使河原蒼風\*邸におもむく、石濤和尚\*画冊、金冬心\*画幅を示さる けだし清朝絶代の傑作也 すし幸の餐席あり、さらに銀座に転じてエスポアルにて小酌清談

\* 勅使河原蒼風 華道家・いけばなの草月流の創始者

\* 石濤和尚 石濤。中国明末清初の画僧

\* 金冬心 金農。冬心は号。中国清代の書家・文人画家

○九月十五日(土)くもり小雨、午後東中野モナミにて近代文学社主催安部公房の受賞祝賀会に出席す、帰途薄暮におよんで佐々木基一野間宏岡本太郎とともに銀座はせ川におもむきまたよし田にて小酌、岡本酔つて佐佐木からむ、新ばしにて三人に別れエスポールにおもむくにたまたま久保田万太郎林房雄に逢ひさらにハムレットにてのむ、ナ

ソ連活動写真真金の星の騎士を見る。写真はつまらなけれどテクニカラ一佳也 帰途若竹にて小酌

○九月二十九日(土)晴。中間物とは何か二十二枚を草し文学界に寄す、新宿紀伊国屋にClaude : Conversations dans le Loir-et-Cher, Alain : Les Saisons de l'esprit, Éléments de philosophie, Camus : Lettres à un ami allemand を購ふ、この夜鈴木貢と連飲するところ よし田江安餐室ハムレット、エスポアル、アカンサス也、江安餐室ははじめておもむきたる店にてその料理賞すべし、中共北京より People's China 人民中国と題する冊子を文藝春秋手帖に名をつらぬる和朝の文人宛に香港経由にて送り来れるよし、余のもとにもまた送られたり、海外向宣伝用とおぼしくこの雑誌の出来工合あしからず

上段：中間物とは何か 二十二枚

○十月二日(火)曇。昨夜よし田及びハムレットにて乱酔いささか疲れたり、久保田万太郎よりその著樹蔭を贈らる、おもしろし、句あり、晴れ行くやそのあさかほの雫より、はがきに書きて遣る 夜三越劇場にて俳優座公演夜の来訪者を観る、翻案物にして通俗芝居なれども飽かず見るに堪へたり

○十月三日(水)曇 角川書店より角川文庫板白描を届け来る

○十月七日(日)晴やゝ寒し、合縁奇縁第三回三十六枚脱稿

上段：合縁奇縁 第三回完結 三十六枚

○十月八日(月)晴、文藝春秋社にて徳田雅彦に合縁奇縁の原稿をわたす、川端康成\*に逢ふ、川端徳田とともに芝西久保巴町なる玉井大閑堂\*におもむく、馬遠\*山水図 □若□山茶花図 栄華物語絵巻残缺\* 引仁仏\* カンダラ仏\*其他いろいろ観る、酒井家蔵馬遠四幅対はニセモノなるがごとし、夜徳田と放送局にて佐藤美子長門美保\*の歌劇を聴く、

ポレオンの某女をつれて鳥森若竹にて小酌 車にて某女を赤坂までおくりて深夜帰宅

○九月十六日(日)曇、終日家居、Sartre : Les jeux sont faits を読む。

○九月十八日(火)曇小雨。昼東宝試写室に Sartre : Les jeux sont faits を観る。藤川栄子母子とはせ川にて小酌、夜日比谷公会堂にて Menuhin\*の演奏会を聴く、Tartini, Franck, Bach, Paganini\* 今日出海に逢ひまたはせ川にて閑談

\* Menuhin ヌニョーヒン(メニューイン)。バイオリニスト

\* Tartini, Franck, Bach, Paganini タルティーニ、フランク、バッハ、パガニーニ いずれも作曲家

○九月二十日(木)晴。角川書店に白描校正をわたす、夜銀座よし田にて今日出海に逢ひアカンサスにおもむく、乱酔

○九月二十一日(金)晴。上野美術館にて新制作派及一水会展覧会を観る。つまらぬを画を見せられて迷惑す、すなはち博物館におもむきて雪舟\*永徳を観て目を洗ふ 帰途よし田及若竹にて河上徹太郎吉田健一と小酌

\* 雪舟 雪舟等楊。室町時代の画僧(禅宗)

○九月二十二日(土)雨。窪田啓作来話、閑談数刻、Sartre : Les jeux sont faits を借す

○九月二十三日(日)晴。昼久しぶりにて浅草をあらく、並木やぶにてビールをのみて帰る、この店のそばよろし、余が幼少のころこの内儀は小粋な年増なりしが今はすでに老いたるを見てをかきおもひをしたり

○九月二十五日(火)小雨、朝より眠りて晩に至る 銀座よし田にて小酌

○九月二十七日(木)晴、やゝ寒。夕刻麻布飯倉なる日ノ親善協会にて

佐藤長門とはせ川ハムレットにて小酌、徳田高輪に來りて濱田に泊

\* 川端康成 小説家

\* 玉井大閑堂 古美術商

\* 馬遠 中国南宋の画家

\* 栄華物語絵巻残缺 『栄華物語』は平安時代に仮名文で書かれた歴史物語。残缺は部分の意

\* 引仁仏 密教が台頭する平安初期の弘仁・貞観時代の仏像のことか

\* カンダラ仏 紀元前後から5世紀のインドで造像され、ヘレニズムの影響の強いガンダラ仏か

\* 佐藤美子、長門美保 ともに声楽家

○十月十二日(金)晴。東宝試写室にて映画白き恐怖バグマンを観る。

そのかへり佐藤美子岡本太郎安部公房とともに吉田にて小憩、安部妻肺患軽からざるが如し 文藝春秋社員中野修迎へにて代々木大井廣介\*宅に坂口安吾を訪ふ。途中読売講堂筈田幸吉\*ピヤノ浚へにて加藤周一に逢ひそのフランス出発する日どり十一月三日にさだまれることを聴く、坂口に逢ふにその神経いさゝか異状を呈するに似たり、競輪告発事件にて強迫観念の兆あきらか也、カミユの本四冊 : Actuelles, Noées, Les Justes, Lettres à un ami allemand を吉田に托して河上徹太郎に借す

○十月十六日(火) \* 昨夜銀座にて城左門に逢ひともに濱田におもむきたるにたまたま徳田雅彦来、すなはち深夜小酌、徳田城濱田に泊、今日夕鈴木貢と吉田にてのむ、河上徹太郎に逢ひ三人にてエスポアルにおもむく、池島信平、徳田鈴木に角川文庫板白描を各一部おくる  
\*この日は天気の記事なし  
○十月十八日(木)晴。昨夜鳥森若竹にて常連の集りあり それよりは

せ川におもむきて吉川幸次郎桑原武夫三好達治中野重治に逢ふ、家にかへれば窪田啓作濱田に泊りて小説を書くよしを聞く、今日終日家居、夜窪田来話、明朝かへるといふ、続猿蓑露伴註\*を読む、けだし七部中もつとも品下りたるもの也 註また精采無し

\*続猿蓑露伴註 『続猿蓑』は江戸中期 松尾芭蕉とその一門の俳諧選集『俳諧七部集』の中の一部。蕉風の変遷の跡を示した。幸田露伴の注釈版と思われる

○十月二十二日(月)晴。夜銀座はせ川にて加藤周一渡欧送別会を催す。

会するもの加藤夫妻 窪田啓作 中村真一郎 吉田秀和\* 白井健三郎\* 池島信平 鈴木貢

\*吉田秀和 音楽評論家

\*白井健三郎 文芸評論家、フランス文学者

○十月二十五日(木)晴。金銭談二十四枚脱藁\*、文学界にわたす、文藝春秋社にて安部公房夫妻岡本太郎に逢ふ ともに三笠会館にて小憩、安部妻病小康をえたるがごとし 夜吉田よりスコット、エスポール、ハムレットにて小酌、今日出海河上徹太郎河盛好藏に逢ふ

\*上段に脱稿の記載なし

○十月二十六日(金)晴、新潮社新田徹来話、夷齋筆談出版につき造本見本として物理小識\*侗菴筆記\*豆腐百珍\*を貸す、吉田にて小酌、夜よし来、車にてよしを原宿なるその家に送る

\*物理小識 中国明清初の思想家・儒学者・禅僧の方以智の著作。科学技術の類書

\*侗菴筆記 『侗菴筆記』。江戸後期の漢学者・儒官の古賀侗庵の著作

\*豆腐百珍 江戸天明年間に出された豆腐料理百種を記した書物

○十月二十七日(土)晴。昼東和商事試写室にてルネ・クレール\*のbeauté du diableを観る、おもしろからず、帰途よし田及びハムレッ

トにて小酌

○十月二十八日(日)雨、終日家居 Maurice Blanchot \* : L'arrêt de mort を読む 思想と生活とがびつこを引ながら並んであるいてゐるやうな小説也 このとき人間像は存在せざるに似たり 人間を書かず因縁を書くといふか、すなはち人生の影なるべし

\* Maurice Blanchot モーリス・ブランショ。フランスの哲学者、作家、批評家

○十一月一日(木)晴。夷齋筆談を本に仕立てるにつき語を識す、語にいふ、夷齋筆談おのづから起りおのづから已み前後首尾を分たず春蠶腹中の絲その已むところよりまた起つて盡くるところを知らざらんとす しかれどもとこれ裨官者流の饒舌にてかの豊干饒舌のかりそめに天機を洩らせるものには似ず 蠶測の見あるひは長安と日といづれが遠きかに拘らざるがごときものあるべし みづから描らずして博雅の家に笑はれなん 鶴林玉露解経不為煩辞のくだりに六経の古註もまた簡潔にして煩辞をなさずといへり 余もとより煩辞を患む あに簡潔を好まざらんや ただ世界は古来すでに六経の外にあり 文章は今日もはや三兩字をもつてよく意義粲然たらしむべき術なきをいかにせむ 余のごときは戦戦兢兢つねに煩に處して簡を失はざらんことに努むるのみ\*、この草藁を新潮社新田にわたす\*、山川朝子来話、中村清二\*著体験の物理中巻下巻を贈らる、朝子と銀座よし田にて小酌、日本橋三越にて岡本太郎個展を観る、夜交詢社構内ビヤホールにて岡本の会に列す藤川栄子安部公房に逢ふ

\*語にいふく努むるのみ 『夷齋筆談』巻頭文と一部の用字以外ほぼ同じ

\*上段に脱稿の記載なし

\*中村清二 物理学者

○十一月四日(日)晴。新宿紀国屋にValéry : Tel quell 2 volumes :

酌 三好達治に逢ふ

Regards sur le monde actuel et autres essais, Vercors\* : Le sable du temps, Yvon Belaval\* : La recherche de la poésie を購ふ、帰途秋田にてキリタンポを食ふ、またお龍にて小酌

\*Vercors ヴェルコール。フランスの小説家、画家 本名：ジャン・ブリュレル

\*Yvon Belaval イヴォン・ベラヴァル。フランスの哲学者

○十一月十六日(金)晴。暁ちかく「夢の殺人」三十五枚脱藁。群像川島の来れるにその草藁をわたす新年号に寄せむがためなり 山川朝子来 夜佐藤美子とよし田ハムレット小笹すしにてのむ

上段：夢の殺人 三十五枚

○十一月十七日(土)晴。井澤義雄神戸より来泊(カマボコを贈らる)。勅使河原宏\*来話、勅使河原と三越にて草月流展覧会を観る、またともに銀座よし田におもむきて小酌。佐藤美子に逢ふ 帰途新ばし演舞場なる文学祭を見物す、久保田万太郎扮するところの鈴ヶ森の権八\*尾上松之助を連想せしめたり 但いささか故人宗十郎\*に似て上出来也

\*勅使河原宏 いけばなの草月流第三代家元(勅使河原蒼風の子、ほか美術、舞台、映画でも活躍)

台、映画でも活躍

\*権八 歌舞伎狂言「鈴ヶ森」の登場人物・白井権八

\*尾上松之助 歌舞伎役者(二代目・映画俳優の尾上松之助のこと)

\*宗十郎 昭和二十四年に亡くなった七代目沢村宗十郎のこと

○十一月十八日(日)晴。井澤義雄西国にかへる、新潮社板ジイド全集を与ふ

○十一月二十一日(水)晴。夜来蜜蜂の冒険十二枚を草す文藝新年号にあたへんがため也、夕よねとともに銀座よし田におもむき山川朝子に逢ひ右草藁をわたす、巖谷大四来り会す、すなはち三人を伴ひてピカデリーにイタリヤ映画ポー河の水車小屋を観る、帰途鳥森若竹にて小

酌 三好達治に逢ふ

上段：蜜蜂の冒険 十二枚

○十一月二十二日(木)晴。窪田啓作妻および娘来話、イナダ両尾を贈らる、神田の町をあるく、帰途よし田及ハムレットにて小酌

○十一月二十八日(水)晴。昨日大井廣介より来信 坂口安吾に絶交状を送りたりといふ 坂口目下行方不明にて消息おぼつかなし、夜来随筆模倣の効用を草す、二十六枚 文学界新年号に寄す、銀座よし田にて杵屋宇太蔵\*に逢ふ、夜文藝春秋社楼上にて戦没社員追悼会に列席す 大井廣介に返信を遣る

上段：模倣の効用 二十六枚

\*杵屋宇太蔵 長唄三味線奏者

○十一月二十九日(木)晴。石濤について知らんとして上野図書館\*におもむきて書を借る、この図書館じつに久しぶりにてここに入らざること十年を越えたり 今これを見るに内部の荒廃はなほだしく好学の人を迎へるにふさはしからず むしろ浮浪者の休み場に似たり 帰途鳥森若竹にて小酌たまたま今日出海に逢ひエスポアルにおもむく、その店を出でてパチンコ屋に行きたるに勅使河原蒼風父子に逢ひまたエスポアルにもどりにて痛飲深夜におよんで帰る

\*上野図書館 前身の帝国図書館から国立国会図書館に改組

○十一月三十日(金)晴。夜中島健蔵の労を謝する会に出席す ステーションホテル宴会場にて盛会也 帰途佐藤美子と赤坂溜池ゴルフ場におもむく さらに佐藤夫妻益田義信\*徳田雅彦らと芝口喫茶店アリアにて小憩、また徳田とエスポアルにて小酌 徳田濱田に来泊

\*益田義信 洋画家

○十二月一日(土)晴。昼濱田におもむきてビールをのむ、徳田雅彦か

へる。夜窪田啓作来話、銀行事務目下多忙のよし

○十二月二日(日)晴。紀ノ国屋にて Jean Giraudoux : Litterature をあがなふ。池田生子伊藤濱子及よねを伴ひて新宿西口すずめ焼鳥屋にて小酌 帰途みちくさに立寄りてかへる

○十二月三日(月)晴。夜来石濤七枚を草す、釋道濟字石濤号大滌子又號清湘老人瞎尊者苦瓜和尚\*前明楚藩の後 累石に巧みにしてその作るところに揚州余氏萬石園あり 画技の神妙いふを俟たず、夜人事院講堂にてロシヤ活動写真ムソルグスキー物語を観る 音楽よろしけれども構成粗雑にて退屈す 帰途藤川栄子母娘と有楽町ジャーマンベーカーにて小憩、さらにひとり銀座よし田に小酌 この朝税務署員某たづね来る

上段：石濤 七枚

\*大滌子・清湘老人・瞎尊者・苦瓜和尚 いずれも石濤の号

○十二月五日(水)晴。勅使河原宏来話、石濤草藁をわたす、安部公房夫妻来話これを伴ひて銀座よし田にて小酌、夜川太郎にて池島信平と逢ひともしせ川におもむきさらに新宿に至りお龍五十鈴にてのむ

○十二月十日(月)晴。さる八日より牛込双葉荘にて別冊文藝春秋のために小説春の葬式三十枚を草し今曉成る、銀座にかへり吉田健一鈴木貢とともに新ばし川太郎にて小酌、ハムレットおよびはせ川にて久保田万太郎今日出海に逢ふ

上段：春の葬式 三十枚

○十二月十一日(火)晴。久保田万太郎よりその著オスロを贈らる、書中オスロにての句に たれ一人日本語知らぬ白夜かな の句あり、この句に二千里の外酒の中汲とつけてはがきに書き遣る、夜若竹にて小酌

○十二月十二日(水)\*銀座東和商事の試写室にてスイス映画ジープの

四人を観る、つまらなし、林達夫に逢ひ若竹にて小酌

\*この日は天気の記事なし

○十二月十三日(木)晴。鎌倉におもむきて八幡宮境内に美術館の新設せるものを観る、ルオー(ミゼレーレ)、黒陶(明器)彩陶(彩文土器)藤川勇造彫刻の陳列あり この日あたたかにして春日のごとし、帰途銀座よし田及はせ川にて小酌、田川博一\*と新宿におもむきて泥酔す

\*田川博一 文藝春秋社の編集者

○十二月十九日(水)晴。島尾敏雄神戸より来話、明春小岩に移転し来るべしと語る、河出書房竹田博来、小説大系本(昭和十年代)のために検印をわたす、夜文藝春秋招待にて帝劇にエノケン\*越路吹雪\*のお軽勘平を観る、愚劣也

\*エノケン 榎本健一。俳優、コメディアン、歌手

\*越路吹雪 シャンソン歌手、女優

○十二月二十日(木)\*夜烏森若竹の忘年会に列す

\*この日は天気の記事なし

○十二月二十二日(土)晴。孤独と抵抗二十八枚を草して文学界二月号に寄す 新宿紀伊国やにて本を買ふ、帰途河盛好蔵に逢ひ新宿にて小酌 Jean Anouilh\* : Antigone, S. de Beauvoir\* : Pour une morale de l'ambiguïté ; L'inivité, Aragon : L'homme communiste, Suarès et Claudel : Correspondence

上段：孤独と抵抗 二十八枚

\* Jean Anouilh ジャン・アヌイ。フランスの劇作家、作家、脚本家

\* S. de Beauvoir シモーヌ・ド・ボーヴォワール。フランスの哲学者、作家、批評家、活動家

○十二月二十四日(月)晴。安部公房来話、ともに多摩川なる岡本太郎

宅のクリスマスパーティーにおもむく、藤川栄子勅使河原蒼風父子に逢ふ

○十二月二十九日(土)晴、このところ冬あたたかにして連夜の酒に疲れたり、日本橋榛原にて色紙を買ふ、神田村口\*二階にて木米\*の水墨、明万歴の春画 花宮錦陣\* 馬琴\*の書簡などを見る、帰途烏森若竹にて小酌 三好達治に逢ふ

\* 神田村口 村口書店のこと

\* 木米 青木木米。江戸後期の京焼の陶工、絵もよくした

\* 花宮錦陣 中国明末の古典春宮画で漢詩と画とが対になった刊本

\* 馬琴 曲亭馬琴(本姓：滝沢)。江戸後期の読本作者

○十二月卅一日(月)雨。夷齋筆談の校正刷を一閲す、雨をついて夕の巷に出づ、若竹にて小酌 直公つくるところのだて巻を購ふ、よし田におもむきたるに客多くしてさわがしければそばのみやげをもちて帰宅 別に直公よりイカの塩からブーチャンより酢莖をおくらる 一寝入して目さむれば夜半三時也 一年のぶら／＼ぐらしここに終る、かへりみるに諸事力をつくすこと十分ならざりしもの多し 売文の毒おそるべし 意あまつて才足らずることかなしむ すなはち床に鉄斎を掛け座右の書あれこれをひらきて黙黙夜をおくる